【題義】劉涇の詩に次韻したのである。王注にいふ、此篇皆所三以裁二抑劉涇之豪氣一也、劉涇好爲二險怪之文一と。紀昀は此詩を評して發端奇逸、通體亦遒緊と言つた。

【詩意】吟蟲唧唧として、坐に秋を悲しましめる。詩を吟じても、秋蟲の聲を作してはならい。天帝は汝が物を鉤する情（鉤とは引つかけて釣り出す）を怪んでか、汝のまだ老いもしないのに、白髮を生ぜしめた。靈芝と蘭草とは香が遠い、そして雨を得ば、蔚として青青となるのである。然るを、なぜ汝は自らを燔いて馨を出すのであるか。薰は香を以て自ら燒き、膏は明を以て自ら消す類でもあらう。さて細く書いた千紙には、眞行の文字を雜へて居る。晉の世以來、書に工なるもの、多く行書を以て名を著はす。そして其の眞を兼ねるもの、之を眞行といふさうである。又、新しい音は、色色と變化して、口は鶯のやうである。かくいふと、異議が恰も蜂の巢から羣り起るやうであつて、弟子までが相爭つて來る。まことに舌は濤瀾を翻へして齊城を卷く類である。これは、酈生が三寸の舌を掉つて齊の七十餘城を下したことを言つたのである。萬卷の書物は胸に堆く、兀然として動かない。相撐へて居る。道を樂しむもの病も以て樂みとする、子は未だ之に驚かないやうである。我にはもと至味がある、それは道の樂みを言ふのであつて、煎烹した食物でない。此の中の樂みは全く何とも名け難い。綠色の槐は、山のやうに鬱蒼と廣庭に樹つて居る。飛ぶ蝨は耳を繞つて細かくて淸い。そして敗れた席に展轉し、臥しながら見て驚く。亦、自ら蝨の爲に翠織の衣の成るを嫌はない（蝨に汙される）足に任せて行けば溝も坑もない。五郎を呼んで卿となすを識らない。唐の世、張易之・張昌宗は則天武后に寵されたので、武承嗣・三思等は易之を五郎といひ、昌宗を六郎といつた。さて易之は宋璟に諂事し、位を虛しうして之に揖し、公は第一人と言つた。すると璟は曰く、我は才が劣り品も卑いのに、卿の第一といふは何ぞと。鄭善は璟に謂つて曰く、公は何ぞ五郎を卿といへる。璟曰く、官が正に卿であるからいふ。併し君は其の家奴でないのに、なぜ郎といふと。郎とは、門生・家奴が其の主を呼ぶの稱である。吏民は我が老いて不明であるを哀み、過があつても、鞭刑を煩はさない。時に行いて泗水に臨んで、白髮を照らせば微風も起らないし、水鏡の面も平かである。どうか、葉のやうな輕い一舟を得て、臥して驛館の夜時計の水程を報ずるを聞きたい。昔、張翰は秋風の起るに因つて、吳中の菰菜・蓴羹・鱸魚膾を思うて、人生適意を得るを貴ぶと言つた。又、王濟は羊酪を指して陸機に謂つて曰く、吳中何を以て此に敵すると。機は答へて、千里の蓴羹、未だ鹽豉を下さないものと言つた。蓴羹や羊酪のことを評するを須ひない。今は一たび十分に食して、飢腸の鳴るのを救ひたいのである。

攜妓樂游張山人園

妓樂を攜へて張山人の園に遊ぶ

大杏金黃小麥熟。
墜巢乳鵲拳新竹。

巢を墜す乳鵲新竹を拳す。

【字解】〔一〕妓樂　劉憲の詩に、開レ筵妓樂陣。〔二〕張山人　前に

故(四)將俗物惱幽人。故らに俗物を將て幽人を惱まし、
細(五)馬紅粧滿山谷。細馬紅粧山谷に滿つ。
提(六)壺勸酒意雖重。提壺酒を勸め意重しと雖も、
杜(七)鵑催歸聲更速。杜鵑歸るを催して聲更に速かなり。
酒(八)闌人散却關門。酒闌はにして人散じ却つて門を關ぢ、
寂(九)歷斜陽挂疎木。寂歷斜陽疎木に挂る。

坦坦、幽人貞吉。紀昀いふ、三四縮合得自然一と。【五】細馬　李太白の詩に、吳姬十五細馬馱。馱は馬走るなり。李太白の對酒歌に、二八佳人細馬馳、青黛畫眉紅錦靴。【六】提壺　鳥の名、王注に提壺之聲、俗做之、如云提壺蘆。【七】杜鵑催歸　世に傳ふ、蜀主杜宇死、其魂爲鳥、名曰杜鵑、聲若云不如歸去。杜子美の詩に、昔日蜀天子、化作杜鵑似老烏。或はいふ、一名子規と、非なり。今、春夏の間、月下に鳥ありて、不如歸去といふもの、此た子規となす。蓋し杜鵑とは、自ら別のみと。成都古今記に、蜀之先有望帝、名杜宇と。【八】酒闌　闌は酣なるをいふ。【九】寂歷　陶淵明の詩に、朔雲吹風寒、寂歷窮秋時。文選、江文通の雜擬詩に、寂歷百草晦。劉禹錫の龍陽縣歌に、汝門草綠見更稀、寂歷斜陽照懸鼓。

【題義】妓を攜へて張雲龍の園に游んだ時の詩である。紀昀いふ、短章而氣脈不促と。又いふ、結句緊對三四句、非以空調取姿也と。

【詩意】大きな杏は熟して色黃に、小麥も實つて穗がふさふさとして居る。子を持つ鵲は、巢を墜して新しい竹に拳をつける。妓樂を攜へて張雲龍山人の園に遊び、故に俗物を將て隱者を惱ました。

ある雲龍山人張天驥である、【三】大杏、小麥　陳后山の談叢に、諺曰、杏熟當二年麥、麥熟當二年禾。故に先生の詩、亦杏・麥を以て竝び舉ぐ。【四】將俗物惱幽人　晉書、王戎傳に、戎每與阮籍、爲竹林之游、戎、嘗後至、籍曰、俗物已復來敗人意、笑曰卿輩、意亦復易敗耶。幽人は世を避けて、隱れ居る人。易、履卦に履道坦坦、幽人貞吉。

種德亭　并に敍

昔、王戎は阮籍と竹林の游をなしたが、嘗て戎が後れて至ると、籍はいふ、俗物已に復來つて人の意を敗ると、戎は笑つて曰く、卿が輩は意また敗れ易きかと。細い馬が走つて青い黛で畫いた眉の美人が紅粧して山谷に一杯となつた。提壺といふ鳥の酒を勸める意は重いが、杜鵑は頻りに不如歸去と鳴いて、歸るを催し、其の聲が更に速かである。やがて酒が酣になつて人が散り、却つて門を關ぢる。既に門を關ぢた後、あたりは寂歷として、夕日は疎木に挂かつて居る。

種德亭　并に敍

處士王復家於錢塘。爲人多技能。而醫尤精。期於活人而已。不志於利。築室候潮門外。治園圃。作亭樹。以與賢士大夫游。唯恐不及。然終無所求。人徒知其接花藝果之勤。而不知其所種者德也。乃以名其亭。而作詩以遺之。

【訓讀】處士王復、錢塘に、家す、人と爲り技能多くして、醫に尤も精し。人を活すに期するのみ。利に志さず。室を候潮門外に築き、園圃を治め、亭榭を作る。以て賢士大夫と游び、唯及ばざらんことを恐る。然れども終に求むる所なし。人は徒に其の花に接し果を蕘うるの勤めを知つて、而も其の種うる所のもの德なるを知らざるなり。乃ち以て其の亭に名つけて、詩を作つて以て之に遺る。

【字解】【一】王復　龍圖閣待制を以て徐州に知たり。高宗の時、金人、兵を引いて徐州を圍む。復は男倚同と軍民を率ゐて力戰す。外援が至らないで城陷る。復、堅く廳事に坐して去らず。賊を罵詈し、闔門百口、皆殺さる。資政殿學士を贈り、壯節と諡す。廟を楚州に立てて忠烈と號す。【二】錢塘　浙江通志に、宋以前之錢塘故城有レ四、一在二靈隱山麓一、一在二錢塘門外一、皆、漢魏時治也、一在二錢塘門內一、今爲二教場地一、唐縣治也、一在二紀家橋華嚴寺故址一、宋縣治也。前にも出づ。【三】候潮門外云云　王文誥いふ、公倅レ杭時、嘗至二候潮門外、王復秀才所レ居、賦二雙檜詩一、有下青蓋一歸無二覓處一、只留二雙檜一待二昇平一句上、蓋隋・唐間物也、其爲二園圃亭樹一、固足下以與二賢士大夫一游上矣。

小圃傍城郭。閉門芝朮香。
名隨市人隱。德與佳木長。
元化善養性。倉公多禁方。
所活不可數。相逢旋相忘。
但喜賓客來。置酒花滿堂。
我欲東南去。再觀雙檜蒼。
山茶想出屋。湖橘應過牆。
木老德亦熟。吾言豈荒唐。

【字解】【一】芝朮香　唐、劉禹錫の送三兄歸二王屋山隱居一詩に、水靜苔莎色、露香芝朮苗。【二】德與二佳木一長　史記に、一歲種レ之以レ穀、十歲種レ之以レ木、百歲種レ之以レ德。文選、張平子の西京賦に、嘉木樹庭、芳草如レ積。【三】元化養レ性　後漢、方術傳に、華陀、字元化、曉二養性之術一、年且二百歲一、而猶有二壯容一、時人以爲レ仙。【四】倉公多二禁方一　史記、扁鵲倉公傳に、倉公者、齊太倉長、姓淳于氏、名意、少而喜二醫方術一、更受二師同郡元里公乘陽慶一、使三盡盡去二其故方一、更悉以二禁方一予レ之。【五】花滿レ堂　李太白の詩に、美人在時花滿レ堂。杜子美の詩に、黃四孃家花滿レ蹊。【六】出レ屋　劉向封事に、扶疏上出レ屋、扶疏は、木の枝の分ち布く貌。【七】過レ牆　曹鄴の詩に、樹影空過レ牆。【八】荒唐　莊子、天下篇に、關尹老聃、古之博大眞人哉。莊周聞二其風一而悅レ之、以二謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭一、時恣縱而不レ儻。

【題義】子由が詩の自注にいふ、王君舊有二園亭一、子瞻兄名レ之曰二種德一、其亭頃以レ貧故鬻レ之矣、元豐乙丑、子由自二績溪一還レ朝、道過二錢塘一作二此詩一、距二東坡寄レ詩已七年、亭已易レ主、而王復尙無レ恙也と。又其の贈二王復秀才一詩に、候潮門外王居士、平昔交游偏二海涯一、本種二松杉一爲二老計一、晚以二亭樹一付二鄰家一、爲レ生有レ道終安隱、好事來游空歎嗟、猶有二東坡舊詩卷一、忻然對レ客展二龍蛇一。紀昀は此詩を評して

【詩意】處士王復は錢塘に住まはれ、室を候潮門外に築いて、園圃を治め、亭樹を作る。小さな圃は、城郭に傍ひ、門を閉ぢても、芝朮の香が來る。其の名は市人に隨つて隱れて居るも、其の德は佳木と共に長い。後漢の華陀字は元化は、養性の術を曉り、年、且に百歲ならんとして、猶ほ壯容があつたから、時人は、以て仙人となした。倉公は少うして醫方術を喜んだが、更めて陽慶を師とすると、慶は倉公をして盡く其故方を去らしめ、之に禁方を授けたといふことである。かくて、活す所は數へきれなく、相逢うて、又、相忘れる。王復も亦、此種の人であるが、世の人は徒らに、其の花を接

し、果を蕘うるの勤勞を知つて、其の種ゑる所のもの、卽ち德であることを知らない。王復は但、賓客の來るを喜び、酒を置いて、花が堂に滿つ。我は東南に行いて、再び雙檜の蒼きを觀ようとする。想ふに山茶は生長して屋を出で、湖邊の橘も茂つて應に牆を過ぎて居るであらう。古語に、一歲、之に種うるに穀を以てし、十歲、之に種うるに木を以てし、百歲、之に種うるに德を以てすとある。木老いて德も亦熟する。吾が言は、決して荒唐の言ではない、眞實の語である。（荒唐の言とは、廣大にして限りなく、漠としてあてども無い言葉をいふ。說文に唐は大言也とあり、詩の毛傳に、荒は虛也と見えて居る。）

次韻僧潛見贈

僧潛贈らるるに次韻す

道人胸中水鏡淸。
萬象起滅無逃形。
獨依古寺種秋菊。
要伴騷人餐落英。
人間底處有南北。
紛紛鴻鴈何曾冥。

道人胸中水鏡淸く、
萬象起滅逃形なし。
獨り古寺に依りて秋菊を種う、
騷人に伴うて落英を餐ふことを要す。
人間底の處にか南北あらん、
紛紛鴻鴈何ぞ曾て冥からん。

【字解】【一】僧潛　僧道潛、字は參寥、於潛の人、文章を能くし、尤も喜んで詩を爲る。嘗て句あり。云ふ、風蒲獵獵弄輕柔、欲立蜻蜓不自由、五月臨平山下路、藕花無數滿汀洲。と。東坡甚だ之を愛し書を以て文與可に告げていふ、其詩句淸絕、與林逋上下、而通了道義、見之令人嘉然。蘇黃門每稱、其體製絕類儲光羲、非近時詩僧所能及。【二】水鏡淸　晉書に、樂廣善談論、尙書令衞瓘、見而奇之曰、此人之水鏡、見之瑩然。【三】騷人　正字通に、屈原作離騷、言遭憂也、今謂詩人爲騷人。【四】有南北　傳燈錄に、六祖曰、人有南北、佛性豈然。

閉門坐穴一禪榻、
頭上歲月空崢嶸。
今年偶出爲求法。
欲與慧劍加礱硎。
雲衲新磨山水出。
霜髭不翦兒童驚。
公侯欲識不可得。
故知倚市無傾城。
秋風吹夢過淮水。
想見橘柚垂空庭。
故人各在天一角。
相望落落如晨星。
彭城老守何足顧。
棗林桑野相邀迎。

門を閉ぢて穴に坐す一禪榻、
頭上歲月空しく崢嶸。
今年偶〻出でて爲に法を求め、
慧劍の與に礱硎を加へんと欲す。
雲衲新たに磨いて山水出で、
霜髭翦らず兒童驚く。
公侯識らんと欲して得べからず、
故知る市に倚る傾城なし。
秋風夢を吹いて淮水を過ぎ、
想ひ見る橘柚の空庭に垂るるを。
故人各〻天の一角に在り、
相望んで落落晨星の如し。
彭城の老守何ぞ顧みるに足らん、
棗林桑野相邀迎す。

【五】坐穴一禪榻　暗に管寧木榻の事を用ひるに似たり。三國志に、管寧自越海、及歸、常坐一木榻、積五十餘年、未嘗箕股、其榻上當膝處、皆穿。【六】歲月空崢嶸　ここの崢嶸は歲月の積み重なる貌にいふ。文選、鮑照の舞鶴賦に、歲崢嶸而愁暮、心惆悵而哀離。【七】求法　維摩經に、求法無懈、說法無吝。【八】與慧劍加礱硎　維摩經に、以智慧劍、破煩惱賊。揚子に、有刀者礱諸、有玉者錯諸。莊子、養生主篇に、庖丁十九年、刀刃若新發

千山不レ憚荒店遠。　千山憚からず荒店の遠きを、
兩脚欲レ趁飛猱輕。　兩脚趁はんと欲す飛猱の輕きを。
多生綺語磨不レ盡。　多生綺語磨けども盡きず、
尚有宛轉詩人情。　尚ほ宛轉詩人の情あり。
猿吟鶴唳本無レ意。　猿吟鶴唳本意なく、
不レ知下有行人行。　知らず下に行人の行くあらんとは。
空階夜雨自清絶。　空階夜雨自ら清絶、
誰使掩抑啼孤惸。　誰か掩抑孤惸に啼かしむる。
我欲仙山掇瑤草。　我仙山に瑤草を掇らんと欲す、
傾レ筐坐歎何時盈。　筐を傾けて坐ろに歎ず何れの時か盈つる。
簿書鞭扑晝塡委。　簿書鞭扑晝塡委、
煮レ茗燒栗宜宵征。　茗を煮栗を燒く宜しく宵征くべし。
乞取摩尼照濁水。　乞ふ摩尼を取つて濁水を照らし、
共看落月金盆傾。　共に落月金盆の傾くを看ん。

於硎。【九】雲衲　杜荀鶴の詩に、穩披雲衲一坐藤牀。【一〇】倚レ市無傾城　倚レ市必ず醜悍にして、傾城の容なきをいふ。漢書、貨殖傳に、諺曰、刺繡文不レ如倚市門。韓退之の詩に、倚レ市難レ藏拙。【一一】秋風吹レ夢云云　李太白の詩に、西憶故人不レ可見、東風吹夢到長安。【一二】橘柚垂空庭　杜子美の禹廟詩に、荒庭垂橘柚。【一三】在天一角　韓退之の祭姪老成文に、一在天之涯、一在地之角。【一四】落落如晨星　劉禹錫の送張盥序に、吾不幸、向所謂同年友、當其盛時、聯レ袂齊レ鑣、亙絶九衢、若屏風然、今來落落如曙星之相望。【一五】桑野　詩、蒸在桑野。孟浩然の詩に、桑野就耕父、荷鋤隨牧童。【一六】飛猱輕　韓退之の征蜀聯句に、飛猱無整轉。【一七】綺語　種種の虛飾語をいふ。梁武帝の文に、但所レ言國美、皆非事實、不レ無綺語之過。【一八】宛轉詩人情　宛轉は、かろやかに舞ふ貌。劉廷芝の代悲白頭翁詩に、宛轉蛾眉能幾時。朱弁、風月堂詩話に、參寥自レ杭謁坡於彭城、一日燕郡寮、謂レ客曰、參寥雖不レ興此集、然不レ可レ不レ惱レ之也。遣官妓馬盼盼、持紙筆、就求レ詩、參寥援筆立成、有下禪心已作沾泥絮、不逐春風上下狂之句上。坡喜曰、吾嘗見柳絮落泥中、謂可以入レ詩、偶未收入、遂爲此人所先云云と見ゆ。【一九】掩抑啼孤惸　孟東野の逢盡上人詩に、追思東林日、掩抑北邙淚。曹植の詩に、自傷蚤孤煢。【二〇】掇瑤草　杜子美の贈李太白詩に、亦有桑宋游、相期拾瑤草。東方朔の與友人書に、脫去十洲三島、相期拾瑤草。【二一】傾筐　詩、國風に、采采卷耳、不レ盈傾筐。【二二】煮茗燒栗　唐、王操の詩に、煮茶燒レ筍伴僧餐。【二三】宵征　詩に肅肅宵征。【二四】摩尼照濁水云云　摩尼は摩尼寶珠の略。譯して如意珠といふ。杜子美の與閻邱師二詩に、夜闌接軟語、落月如金盆、惟有摩尼珠、可照濁水源。

【題義】此詩は、僧道潛、字は參寥の贈られた詩に次韻したのである。道潛は於潛の人で、文章を能くし、尤も喜んで詩を爲る。王文誥いふ、此詩及後次韻潛師放魚一篇、施編在王鞏留別登雲龍山詩後、不レ誤、查注據烏臺詩案、改編四月云云と。紀昀は此詩を評して一氣湧出、毫無和韻之跡と言つた。

【詩意】參寥道人の胸中は、水鏡のやうに清くて、之を見る、まことに瑩然である。來れば映り、去れば消え、萬象は胸中に起滅して、形を逃れることが出來ない。道人には友もなく、ただ秋菊の種ゑてある古寺に、靜に倚つて居る。されば、詩人に伴つて落英を餐ふことを要する。併し一寸其人を得ない。平等にも差別があつて、人間到る處に南北の異同があるからである。六祖も人に南北あり、佛性に南北なしと言つた。さて、鴻鴈も春は北し、秋は南する。北に去つて、復、南に來る。紛紛何ぞ

曾て冥からんや、昔、管寧は越海より歸り、一篋床五十年、膝に當る處が、皆、穿つたといふことである。穴に坐す一禪榻、頭を回らせば、歳月は空しく積つて崢嶸である。今年偶〻出で、法を求めて懈るなく、法を說いて吝まない。卽ち智慧劍を以て、煩惱の賊を破らうとし、刃を砥石に加へて、鋭利ならしめる。道人の雲衲(僧衣)は新に磨いて、山水が出たやうであるが、霜の髭を翦らないので、驚いたのは兒童である。かかる脫離の身は、公侯の高きと雖も、之を識らうとして識ることが出來ない。元來、市に倚るは醜悍であつて傾城の容色がない。韓退之も市に倚れば拙を藏し難いと言つた。さて、秋風は夢を吹いて淮水を過ぎる。それに就いても、橘や柚の空庭に垂れて居る故鄕が目にちらついて懷しい。思へば、故人は遠く離れて各〻天の一角に在る。同年の友として、盛時には袂を聯ね鑣を齊しうして九衢を歩いたものを、今は遠く隔つて、落落として合ひ難いこと、恰も晨星を相望むがやうである。彭城の老守(東坡自らいふ)たる此身は、何ぞ顧みるに足らんや。棗の林、桑の野に相邀迎する。千山、荒店の遠きをも憚らない。兩脚は飛猱のやうに輕く飛んで趁らうとする。種種の虛飾の語、それは磨いても盡きない。尙ほ宛轉として詩人の情緖が見える。道人は杭から遙遙彭城に來つて、東坡に謁した。一日、郡寮に酒宴が開かれる。東坡は客に謂ふやう。參寥道人は、此集ひに與からないが、一つ道人を煩はさなければならないと、官妓をして紙筆を持たせて、詩を求めた。道人は筆を援つて立ろに一詩成る。それは禪心已作泊レ泥絮、不下逐二春風一上下狂上といふ名句であつた。東坡は喜んでいふ。吾、嘗て柳絮の泥中に落ちるを見たが、以て詩に入るべしと思つて居た。未だ收入しないうちに此人に先んぜられたと言つたさうである。猿の吟じ鶴の唳くのは本意なく、其下に之を聽いて情に堪へない行人があらうとは知らないであらう。(猿吟鶴唳は、人をして悲しましめる)又、空階の夜雨は、自ら淸絶である。誰か我心を掩抑して孤竪に啼かしめる。(玩二此四句一、形二容參寥詩情之妙一、使二行旅孤悽聞レ之淒婉一也)我は仙山に游んで、其の瑤草を掇らうとする。搖草を采り采つても、傾筐に盈たない。筐を傾けて坐ろに歎ず、何れの時か盈つると。簿書の事務、鞭扑の刑罰が堆積して晝間は離れることが出來ない。茗を煮、栗を燒いて宵に征くこととしよう。夜闌にして軟語に接し、落月は金盆の如くである。ただ摩尼寶珠(如意珠と譯す)を取つて濁水を照らすことが出來る。我は道人と共に金盆を傾けたやうな落月を看ようと思ふ。(紀昀いふ、詩家高境、猿吟二句、寫二盡竟境超妙之至一、空階二句、便不レ及二其自然一、此故可レ思と。)

【餘錄】東坡が吳興に守たりしとき、參寥と松江に會ふ。東坡既に謫居す、二千里を遠しとせずして、齊安に相從ひ、留まること期年。汝・海に移るに遇うて、同じく廬山に遊び、次韻。留別の詩あり。東坡、錢塘に守となり、智果精舍を卜して之に居る。院に入り、韻を分ち、詩を賦して又參寥泉銘を作る。東坡の南遷するや、當路、亦、其詩語を捃うて刺譏ありと謂ひ、罪を得。建中靖國(宋、徽宗の年號)の初め、曾子開、翰苑に在りて、其の罪にあらざるをいひ、詔して復薙髮せしむ。咸淳臨安志に、道潛、於潛、浮溪邨人、字參寥、本姓何、幼不レ茹レ葷、以二童子一誦二法華經一、爲二比邱一、於二內外典一無レ所レ不レ窺、崇寧末、示寂、賜二號妙總大師一。王文誥いふ、參寥、本於潛僧、公倅レ杭時、但於二行部一、

一遇レ之、集中無二一字之及一、其後與二秦太虛一書云、參寥眞可人、太虛與レ之不レ妄云云と。

次韻潛師放魚

潛師の放魚に次韻す

法師說レ法臨二泗水一。　法師法を說いて泗水に臨み、
無數天花隨二塵尾一。　無數の天花塵尾に隨ふ。
勸將二淨業一種西方。　淨業を將て西方に種ゑんことを勸む、
莫待二夢中呼起一起。　夢中呼び起すを待ちて起くること莫れ。
哀哉若レ魚竟坐レ口。　哀しいかな魚の若く竟に口に坐す、
遠媿知レ幾穆生醴。　遠く媿づ幾を知る穆生の醴。
況逢二孟簡一對二盧仝一。　況んや孟簡に逢うて盧仝に對す、
不レ怕校人欺二子美一。　怕れず校人の子美を欺くを。
疲民尙作二魚尾赤一。　疲民尙ほ魚尾の赤きを作す、
數罟未除吾頹泚。　數罟未だ除かず吾が頹泚たり。
法師自有二衣中珠一。　法師自ら衣中の珠あり、

【字解】【一】泗水　泗水、淮に入る故道は、徐州より以南、悉く黃河に占めらる。今の泗河は、泗水・曲阜・滋陽・濟寧を歷、東流して運河に入る乃ち古泗水上游である。【二】天花隨二塵尾一　佛頂心經に、觀世音菩薩、說二此陀羅尼一已、天雨寶花繽紛亂下。高僧傳に、梁僧法雲講次、天花散鑒。塵尾は拂子。晉書、孫盛傳に、盛嘗詣レ造談論、對食奮二擲塵尾一、毛悉落二飯中一。【三】淨業　梁武帝の淨業賦に、見二淨業之可レ愛、以不レ殺而爲レ因【四】夢中呼起云云　鄒玄が孔子を夢る事を用ふ。後漢の鄒玄、孔子を夢む、孔子之に告げて曰く、起起今年歲在レ辰、明年歲在レ巳、既悟、以レ讖合レ之、知二命當レ終、讖曰、歲在二龍蛇一賢人嗟。【五】知レ幾穆生　退曰、可二以逝一矣、醴酒不レ設、王之意怠、不レ去、楚人將レ鉗二我於市一、遂謝レ病而去。【六】孟簡　盧仝、孟簡は常州の刺史となり、盧仝と北湖に遊び、盡く魚人の獲し所の魚を買つて之を放つ。仝、觀二放魚一歌を作る。唐詩紀事に、孟簡、字幾道、德州人、元和中、擢レ第。【七】校人欺二子美一　校人は池沼を主る小吏、孟子、萬章章句に、昔者、有レ饋二生魚於鄭子產一、子產使二校人畜之池一、校人烹レ之、反命曰、始舍レ之、圉圉焉、少則洋洋焉、攸然而逝、子產曰、得二其所一哉、校人出曰、孰謂二子產智一、予既烹而食レ之云云。左傳、襄公二十五年に、子美入、數レ俘而出。杜預いふ、子美、子產也と。【八】魚尾赤　詩、國風に、魴魚赬尾。毛詩、鄭箋に、赬、赤也、君子仕二於亂世一、其顏色瘦病、如二魚勞則尾赤一。【九】衣中珠　三秦記に、漢武帝遊二昆明池一、見二大魚銜レ索而放レ之、間三三日一、池濱得二明月珠一雙一、帝曰、是魚之報耶。楞嚴經に、譬如下有レ人於二自衣中一繫中如意珠上、不二自覺知一、窮二露它方一、乞食馳走、忽有二智者一、指二視其珠一、所レ願從レ心、致二大饒富一、方悟衣珠非二從レ外得一。法華經に、有レ人醉臥、以二無價寶珠一繫二其衣裏一。【一〇】辛苦泥沙底　白樂天が放魚詩に、施レ恩卽望レ報、吾非二斯人徒一、不レ須泥沙底、辛苦覓二明珠一。

不レ用辛苦泥沙底。

用ひず辛苦泥沙の底。

【題義】此詩は元豐元年九月の作である。參寥道人が杭州から來訪して虛白堂に館した時、道人が作つた放魚の詩がある。其詩に次韻したのである。紀昀は此詩を評して、語意粘滯と言つた。參寥子集に、此詩の序がある。云ふ、虛白齋與二子瞻一共坐、有レ客饋二魚於子瞻一、子瞻遣レ放レ之、遂命賦二是詩一と。又、參寥の原作詩は、嘉魚滿レ盤初出レ水、尙有二青萍一點二紅尾一、銀鰓戢戢畏二烹煎一、崛强有レ時俄白起、彼客殷勤贈二使君一、願向二中厨一薦二醪醴一、使君事レ道不レ事レ腹、杞菊終年食甘美、傳呼愼勿レ付二庖人一、百步洪邊放二淸泚一、回レ首無レ欺子產淳、漫道悠然泳二波底一といふのである。

【詩意】參寥道人が泗水に臨んで法を說くと、無數の天花散墜して、其の拂子に隨ふを見る。梁の武帝は、淨業の愛すべきを見て、殺さざるを以て因となしたが、淨業を將て西方淨土に種ゑんことを勸めたい。後漢の鄭玄は、嘗て孔子を夢みた。孔子之に告げて宣はく、起きよ起きよ、今年、歲は辰に在り、明年、歲は巳に在ると。既に悟り、識を以て之に合せ、己の命の當に終るべきを知つたといふ。佛道に志す人、夢中に呼び起されて、起きるのでは役に立たない。顧みれば哀いかな我は魚の如く竟に口ゆゑに罪に坐せられた。(東坡が口禍を取るをいふ、紀昀いふ、竟坐レ口三字、不二明了一と。)昔、楚の元王は、置酒毎に、穆生の爲に醴を設けた。(穆生は酒を嗜まなかつた。)王戊が位に卽くに及び、初めは元王の如くにしたが、後に醴を設けることを忘れた。すると穆生は王の意怠る、去らなければ楚人は將に我を市に鉗せんとすると言つて、病を謝して去つたといふことである。口の禍に罹つた我は幾を見て去るを知る所の穆生に媿ぢる。まして、孟簡に逢ひ、盧仝に對しては、面を向けられない。(孟簡や盧仝は、參寥道人に比したのである。)孟簡は常州の刺史であつたとき盧仝と共に北湖に遊び、盡く漁人の獲た魚を買つて之を放つと、盧仝は放魚を觀る歌を作つた。參寥道人の放魚も、此類であらう。我はかの校人が鄭の子產を欺いたやうなことをば怕れない。或人が生魚を子產に饋つた。子產は校人(池沼を主る小吏)をして之を池に蓄へしめると、校人は之を烹て、反命していふやう、魚は悠然として逝いたと。子產曰く、其の所を得たるかなと。校人は出でていふ、孰か子產を智といふ、我の魚を烹て食つたことも知らないと。ここは此の故事に據つたのである。疲れた民は、魚尾の赤きに似る。魚は勞すると、尾が赤くなる。目の細い網がまだ除かれないので、我が額は孟子の所謂泄たるものである。(顙は額、泄は汗の出る貌)參寥道人には、自ら衣中に如意珠があるから、何も辛苦して泥沙底に入り、そして明珠を覓めるにも及ぶまい。

【餘錄】烏臺詩案に、軾知二徐州一日、有二相識浙僧道潛一、來相看、同在二河亭上一坐、見二人打魚、其僧買レ魚放生、作詩一首一、卽無二譏諷一、軾依レ韻和二詩一首一云、疲民尙作二魚尾赤一、數罟未レ除吾顙泄。左傳云、(哀公十七年)如三魚頳尾衡レ流而方二羊(彷徉と通ず)裔一、注云、魚勞則尾赤、是時徐州大水之後、役夫數起、軾言、民之疲病、如二魚勞而尾赤一也、數罟、謂二魚網之細密者一、以言下民旣疲病、朝廷又行二靑苗助役一、不二爲除放一、如中密網之取魚、皆以譏二朝廷新法不便、以致二大水之災一也。

文與可有詩見寄云。待將一段鵝溪絹。掃取寒梢萬尺長。次韻答之

文與可詩あり寄せられていふ、一段鵝溪の絹を將るを待つて、掃ひ取らん
寒梢萬尺の長きをと。次韻して之に答ふ

爲レ愛鵝溪白繭光。　鵝溪白繭の光を愛するが爲に、
掃殘雞距紫毫芒。　掃殘す鷄距紫毫の芒を。

【字解】〔一〕文與可　文同、字は與可、詩文篆隸行草飛白を善くし、又善く竹を畫く、逸士に擧げられ、

世間那有千尋竹。　世間那ぞ千尋の竹あらんや、
月落庭空影許長。　月落ち庭空しきも影許く長からん。

甚だ良し、時の人、之を鵝溪の絹といふ。茶錄に、蜀東川鵝溪出二畫絹一、作二茶羅底一佳。查注に、鵝溪、今在二潼川一、畫絹所レ出。【三】

●雞距　黄山谷の宣城の筆を送るを謝する詩に、宣城鑾樣蹲雞距。東坡も亦嘗いふ。久在二海外一、舊所レ寶筆皆腐敗、至レ用二雞距筆一。白樂天の雞距筆賦に、足之健兮有二雞足一、毛之勁兮有二兎毛一、就二足之中一、奮發者利距、在二毛之內一、秀出者長毫、合爲二乎筆一、正得二其要一。【四】

●紫毫　白樂天の詩に、紫毫筆、尖如レ錐兮利如レ刀。江南石上に老兎あり、竹を喫し、泉を飲んで、紫毛を生ず。

【題義】文與可は善く竹を畫くので、四方愛するものが甚だ多く、東坡が徐州に在つた時、與可は詩を寄せて、待レ將二一段鵝溪絹一、掃取寒梢萬尺長といふ。東坡謂へらく、竹長萬尺、世寧有レ之と。遂に此詩を寄せたのである。與可は答へることが出來なかつたさうである。

【詩意】蜀、東川の鵝溪には、良い繭を產する、製して畫絹となす。其の光澤を愛するが爲に、君は雞距の筆を振つて絹の面を一掃された。雞距の筆は紫毫で、尖れることは錐の如く、利なることは刀の如くである。畫竹の妙も、さることながら、君の所謂寒梢萬尺長の言は、首肯が出來ない。竹の長さ萬尺、世間に何ぞ千尋の竹があらうぞ。ただ月が落ち、庭も空しくなつても、此の竹の影だけは、かく長く寫されて居るであらう。東坡は嘗て篔簹谷の偃竹記を作つていふ、與可竹を畫く、初め、自ら貴重せず。四方の人、縑素を持して請ふもの、足、其の門に相躡む。與可、之を厭ひ、これを地に投じ、罵つて曰く、吾將に以て韈となさんとす。士大夫之を傳へて、以て口實となす。與可、洋州より還るに及んで、余、徐州と爲る、與可、書を以て余に遺つていふ、近ごろ士大夫に語ぐ、吾が墨竹の一派は、近ごろ彭城に在り、往いて之を求むべしと。韈材は當に子に萃まるべし。書尾に復、一詩を寫す、其略にいふ、擬將二一段鵝溪絹一、掃取寒梢萬尺長と。余謂へらく、竹の長さ萬尺ならば當に絹二百五十匹を用ふべし。知る、公、筆硯に倦んで、此絹を得るを願ふをと。與可以て答ふるなし。則ち曰く、吾が言妄なり、世豈萬尺の竹あらんやと。余因つて之を實にし、其の詩に答ふ云云。與可笑つて曰く、蘇子辨は則ち辨なり。然れども二百五十匹、吾將に田を買うて歸老せんとすと。因つて畫く所の篔簹谷偃竹を以て予に遺つて曰く、此竹は數尺のみ、しかれども萬尺の勢ありと。

【餘錄】東坡の文與可畫篔簹谷偃竹記は、

竹之始生、一寸之萌耳、而節葉具焉、自二蜩腹蛇蚹一以至二於劒拔十尋一者、生而有レ之也、今畫者、乃節節而爲レ之、葉葉而累レ之、豈復有レ竹乎、故畫レ竹、必先得二成竹於胸中一、執レ筆熟視、乃見二其所レ欲レ畫者一、急起從レ之振レ筆、直遂以追二其所レ見、如二兎起鶻落一、少縱則逝矣、與可之敎レ予如レ此、予不レ能レ然也、而心識二其所一以然一、夫既心識二其所一以然一、而不レ能レ然者、內外不レ一、心手不二相應一、不レ學之過也、故凡有レ見二於中一、而操レ之不レ熟者、平居自視了然、而臨レ事忽焉喪レ之、豈獨竹乎、子由爲二墨竹賦一、以遺二與可一曰、庖丁解レ牛者也、而養レ生者取レ之、輪扁斲レ輪者也、而讀レ書者與レ之、今夫子之託二於斯竹一也、而予以爲二有レ道者一則非邪、子由未二嘗畫一也、故得二其意一而已、若レ予者、豈獨得二其意一、幷得二其法一、與可畫レ竹、初不二自貴重一、四方之人持二練素一而請者、足相二躡於其門一、與可厭レ之授二諸地一而罵曰、

吾將以爲韈、士大夫傳之、以爲口實、及與可自洋州還、而余爲徐州、與可以書遺余曰、近語士大夫、吾墨竹一派、近在彭城、可往求之、韈材當萃於子矣、書尾復寫一詩、其略曰、擬將一段鵝溪絹、掃取寒梢萬尺長、予謂與可、竹長萬尺、當用絹二百五十匹、知公倦於筆硯、願得此絹而已、與可無以答、則曰、吾言妄矣、世豈有萬尺竹哉、余因而實之、答其詩曰、世間亦有千尋竹、月落空庭影許長、與可笑曰、蘇子辨則辨矣、然二百五十匹、吾將買田而歸老焉、因以所畫篔簹谷偃竹、遺予曰、此竹數尺耳、而有萬尺之勢、篔簹谷在洋州、與可嘗令予作洋州三十詠、篔簹谷、其一也、予詩曰、漢川脩竹賤如蓬、斤斧何曾赦籜龍、料得清貧饞太守、渭濱千畝在胸中、與可是日與其妻遊谷中、燒筍晚食、發函得詩、失笑噴飯滿案、元豐二年正月二十日、與可歿於陳州、是歲七月七日、予在湖州、曝書畫、見此竹、廢卷而哭失聲、昔曹孟德祭橋公文、有車過腹痛之語、而予亦載與可嘗昔戲笑之言者、以見與可於予親厚無間如此也。

といふのである。首に胸中得る所の畫竹の妙を敍し、次に與可一生得意の筆を敍し、末に記を作るの意を敍す。坡公か與可か、篔簹の竹か、復、辨ずべからず。

聞辯才法師復歸上天竺以詩戲問

辯才法師復上天竺に歸ると聞き、詩を以て戲れに問ふ

道人出山去。山色如死灰。　道人山を出でて去る、山色は死灰の如し。

白雲不解笑。青松有餘哀。　白雲笑ふことを解せず、青松餘哀あり。

忽聞道人歸。鳥語山容開。　忽ち道人の歸るを聞き、鳥語山容開く。

神光出寶髻。法雨洗浮埃。　神光寶髻より出で、法雨浮埃を洗ふ。

想見南北山。花發前後臺。　想ひ見る南北の山、花發く前後の臺。

寄聲問道人。借禪以爲詼。　聲を寄せて道人に問ひ、禪を借りて以て詼を爲す。

何所聞而去。何所見而回。　何の聞く所にして去り、何の見る所にして回る。

道人笑不答。此意安在哉。　道人笑つて答へず、此意安くに在るや。

昔年本不住。今者亦無來。　昔年本住まず、今者亦來るなし。

此語竟非是。且食白楊梅。　此語竟に是にあらず、且つ食ふ白楊梅。

【字解】【一】辯才法師　名は玄淨、字は無象。【二】上天竺　寺の名。浙江杭縣に在る。天竺寺に三あり、飛來峯の南に在るを下天竺寺といひ、稽留峯の北に在るを中天竺寺といふ。均しく隋の時に建つ。北高峯の麓に在るを上天竺寺といふ、吳越の時に建つ。【三】山色如死灰　盧仝の月蝕詩に、青山死灰色。莊子、盜跖篇に、孔子下車、色若死灰。【四】白雲不解笑　元微之の詩に、桃花解笑鶯能語。【五】餘哀　杜子美の詩に、白鷗元水宿、何事有餘哀。【六】神光出寶髻　楞嚴經に、世尊從肉髻中、涌百寶光、光中涌出千葉寶蓮。【七】法雨洗浮埃　法華經に、雨大法雨、浮埃は輕いほこり。楊炯の詩に、參差凌倒景、潚灑軼浮埃。【八】南北山花發云云　白樂天の寄天竺二詩に、西澗水流東澗水、南山雲起北山雲、前臺花開後臺見、上界鐘聲下界聞。【九】何所聞而去云云　晉書、嵇康傳に、嵇康居貧、嘗與向秀、共鍛於大樹之下、以自贍給、鍾會往造焉、康不爲之禮、而鍛不輟、良

久會去、康謂曰、何所聞而來、何所見而去、會曰、聞所聞而來、見所見而去。【一〇】此意安在哉　李太白の對酒詩に、君若不飲酒、昔人安在哉。【一一】本不住　金剛般若經に、應生無所住心、若心有住、則爲非住。無所住は、維摩經の所謂無住の本なり。【一二】亦無來　金剛經に、如來者、無所從來、亦無所去。又、阿那含、名爲不來、而實無不來。阿那含は譯して不來又は不還といふ。修行の功德により、再び食・色等の欲心强盛な此世界に生れ來ることがないからである。【一三】白楊梅　北戸雜錄に、鄭虔云、越州客、山有白楊梅。杭州圖經にいふ、楊梅塢、在南山近瑞峰、楊梅尤盛、有紅白二種、今杭人呼白者爲聖僧梅。

【題義】施註に據るに、沈公遘治杭、以下上天竺本觀音大士道場、以聲音懺悔爲佛事、非禪那居上乃請師、以敎易禪、師至、吳越人爭以檀施（檀那に同じ、檀は梵語、施は漢語。）歸之、重樓傑閣冠於浙江、詔名其院曰靈感觀音、居十七年、僧文捷者、利其富、倚權貴人、以動轉運使、奪而有之、遷師於下天竺、師恬不爲忤、捷猶不厭、使者復爲逐師於潛、逾年而捷敗、事聞、朝廷復以上天竺畀師、捷之在天竺也、吳人不悅、施者不至、巖石草木爲之索然、及師之復、士女不督而至、山中百物、皆若有喜色、趙清獻親見而贊之曰、師去天竺、山空鬼哭、天竺師歸、道場光輝。先生の此詩、前五聯は、皆、其の去來の實を紀したのである、紀昀いふ、題有戲字戲語、原不礙格、但苦似偈非詩耳と。王文誥いふ、通篇如謎、皆不道破、住得更妙と。

【詩意】辯才法師は、曩に僧文捷の爲に陷れられて、上天竺寺を出で去る。寺は道人を失つてから、檀施はなく、巖石も草木も、之が爲に索然であつた。仰いで山を看ると、山の色は死灰のやうであり、白雲も笑を含まないし、青松にも餘哀が見える。忽ち道人の歸ると聞いて、士女は督せずして至り、鳥語も山容も開けて、山中の百物、皆、喜びの色を見はした。昔、世尊は肉髻の中から百寶の光を發し、光中、千葉の寶蓮を湧出したといふことである。又、法華經にも大法雨を雨らすといふことが見えて居る。道人も定めし此の如くであらう。想ひ見る南北の山、南山の雲は起す北山の雲。又、見る前後の臺、前臺は花開いて後臺に見る。先づ言を寄せて道人に問ひ、禪を借りて詼（戲謔）をなす。晉の嵇康は、嘗て向秀と大樹の下で鍛冶をなした。鍾會が訪問する、康は禮をしないし、鍛も輟めなかつた。久しうして、會が去らうとすると、康はいふ、何の聞く所あつて此處に來り、何の見る所あつて此處を去ると。會は乃ち聞く所を聞いて來り、見る所を見て去ると言つたさうである。今我も亦道人に問ふ、何の聞く所にして去り、何の見る所にして回ると。道人は笑つて答へなかつた。さて、此の意は安くに在る。所謂無所住にして、始めて其の心を生ずるのである。（絕對の實理に安住すれば、動靜自在の妙用を現ずる。）昔、もと住まない、故に今、亦來るなし。阿那含（不來と譯す）其の名は、來らずであるから、再び此の世界に生れ來らざるべし。而も其の實は、來らざるなしである。まあ、白楊梅でも食はうよ。（杭州には、楊梅が尤も盛で、紅・白の二種がある。そして杭人は白いものを呼んで聖僧梅とする。）

和子由送將官梁左藏仲通

雨足誰言春麥短。雨足るに誰か言ふ春麥短しと、

〜【字解】【一】梁左藏　卽ち梁交。

城堅不怕秋濤卷。
日長惟有睡相宜。
半脫紗巾落紈扇。
芳草不鋤當戶長。
珍禽獨下無人見。
覺來身世都是夢。
坐久枕痕猶著面。
城西忽報故人來。
急掃風軒炊麥飯。
伏波論兵初矍鑠。
中散談仙更清遠。
南都從事亦學道。
不惜腸空誇腦滿。
問羊他日到金華。

城堅うして怕れず秋濤の卷くを。
日長うして惟睡の相宜しきあり、
半は紗巾を脫し紈扇を落す。
芳草鋤かず戶に當つて長く、
珍禽獨り下つて人の見るなし。
覺め來れば身世都て是れ夢、
坐久しきも枕痕猶ほ面に著く。
城西忽ち報ず故人來ると、
急に風軒を掃うて麥飯を炊ぐ。
伏波兵を論じて初めて矍鑠、
中散仙を談じて更に清遠。
南都の從事も亦道を學び、
腸の空しきを惜まず腦の滿つるを誇る。
羊を問うて他日金華に到らば、

左藏は官名。前に出づ。【二】雨足 白樂天の秋游原上詩に、是時雨新足、禾黍夾道青。【三】秋濤 皇甫湜の祭柳子厚文に、子之文章、秋濤瑞錦。東坡詩に、聊欲麻三昧眠、秋濤春手枕。【四】日長惟有睡相宜 唐庚の醉眠の詩に、山靜似太古、日長如小年。歐陽文忠公が石枕竹簟の詩に、自然惟有睡相宜。【五】脫紗巾 司空圖の詩品に、脫巾獨步。劉長卿の詩に、向風長嘯戴紗巾、野鶴由來不可親。【六】紈扇 江淹の詩に、紈扇如團月、出自機中素。文選、班婕妤の詩に、新裂齊紈素、鮮潔如霜雪、裁成合歡扇、團團似明月。【七】芳草不鋤 云云 蜀志、周羣傳に、先主將誅張裕、諸葛亮、表請其罪、答曰、芳蘭生門、不得不鋤。【八】珍禽 書、旅獒に、珍禽奇獸、不育于國。

應許相將遊閬苑。

應に許すべし相將ゐて閬苑に遊ぶことを。

飯。東坡の自注にいふ、徐州所出と。後漢書、馮異傳に、光武詔曰、蕪蔞亭豆粥、滹沱河麥飯、厚意久不報。謝承の後漢書に、李固爲太守食麥飯。【一】伏波論兵云云 後漢書、馬援傳に、伏波將軍劉尙擊武陵五谿蠻軍沒、馬援請行、時年六十二、帝愍其老、未許之、援曰、臣尙能被甲上馬、光武帝令試之、援據鞍顧盼、以示可用、帝笑曰、矍鑠哉是翁也。矍鑠は年老いて壯健なるをいふ。袁宏の後漢紀に、世祖曰、伏波論兵、常與吾合。【三】中散談仙 晉書、嵇康傳に、嵇康與魏婚、拜中散大夫、常修養性服食之事、彈琴詠詩、自足於懷、以爲神仙、稟之自然、非積學所得、至於邊養得理、則安期彭祖之倫可及、乃著養生論。梁、鍾嶸の詩品に、嵇康詩、託喩清遠。【三】學道 王注に、南都從事、謂子由也、是時子由從張文定、簽書南京判官、先生嘗云、余觀子由、自少曠達、天資近道、又得至人養生長年之訣、子由亦嘗云、學道三十年、今始粗聞道也。【四】腸空誇腦滿 道家口訣に、欲得不死、腸中無滓、欲得不老、還精補腦。眞誥上淸眞人口訣、夫學道之人、安心養神、服食治病、使腦宮塡滿、元精不傾、然後可以存神服霞・呼吸二景。【五】問羊他日到金華 東坡の自注に、黃初平之兄、尋其弟於金華山。神仙傳に、黃初平、年十五、家使牧羊、有道士、見其良謹、將至金華山石室中、四十餘年、其兄初起、尋索得見、問羊何在、初平曰、近在山東、往視之、但見白石、初平叱曰羊起、白石皆變爲羊數萬頭。【六】遊閬苑 集仙錄に、西王母居閬風之苑。東方朔、十洲記に、崑崙山三角、其一角正北、干辰星之輝、名閬風。

【題義】子由が梁仲通を送る詩に和したのである。合注に、此詩次子由韻とある。紀昀は此詩を評して語自疎爽、然究是應酬之作、毫無意義と言つて居る。

【詩意】雨が十分に降つて、地を潤したのに、誰か言ふ、春の麥の生長することが短いと。又、城が堅固であるから、水が出て秋濤の卷いて來るやうであるをも、別に怕れはしない。日長うして、竹簟

身世都是夢　楞嚴經に卻來觀世間、猶如夢中事。【一〇】炊麥飯　世說に、猶如夢中事。

の上、ただ睡るに宜しい。睡つて心地よく、戴ける紗巾は半分脱け、手にして居た白い練絹の扇も、何時しか床の下に落ちた。家の前には、芳草が生えたままであり、珍しい禽類が飛び來つても、見る人もない。夢か眞か、覺め來れば、此身も此世も都て是れ夢である。睡から起き、久しく坐つたが、枕の痕は猶ほ面に著いて居る。城西に忽ち故人の來れるを知らせたものがあるので、急に風軒を掃うて麥飯を炊いだ。後漢の馬援は、年六十二、武陵五谿の蠻軍を擊たんと請ふと、光武皇帝は其の老いたるを愍んで許さなかつた。援は鞍に據り、顧盼して其の用ふべきを示すと、帝は笑つて、矍鑠たるかな是翁やと言はれた。晉の嵇康は魏と婚して、中散大夫に拜せられた。然るに常に養性服食の事を修め、琴を彈じ、詩を詠ず。以爲らく、神仙は之を自然に禀けるものであつて、積學の得る所ではないと。乃ち養生論を著はした。是れ仙を談じて、更に清遠である。南都の從事である子由も、亦、道を學んで、腸の空しきを惜まないし、腦の滿つるを誇つて居る。されば黃初平の兄のやうに、他日弟を尋ね羊を問うて金華山の石室中に到らば、相將ゐて西王母の閬風の苑に遊ぶことを許されるであらう。(仙人の仲間入が出來るであらう。)神仙傳に據ると、黃初平は、年十五の頃、其の家のものが羊を牧せしめた。道士あり、其の良謹を見て、將ゐて金華山の石室中に至る。後、其の兄が尋ねて見え、羊は何くに在ると問ふ。初平曰く、近く山の東に在りと。往いて之を視れば、但、白石であつたが、初平が叱して羊起てといふと、白石は皆、變じて羊數萬頭となつたといふことである。

次韻秦觀秀才見贈。秦與孫莘老李公擇甚熟。

將入京應舉

秦觀秀才贈らるるに次韻す、秦、孫莘老・李公擇と甚だ熟し、將に京に入り擧に應せんとす

夜光明月非所投。
逢年遇合百無憂。
將軍百戰竟不侯。
伯郎一斗得涼州。
翹關負重君無力。
十年不入紛華域。
故人坐上見君文。
謂是古人吁莫測。
新詩說盡萬物情。
硬黃小字臨黃庭。

夜光明月投ずる所にあらず、
年に逢ひ遇合百も憂へなし。
將軍百戰して竟に侯たらず、
伯郎一斗涼州を得。
關を翹げ重きを負ふは君力なし、
十年紛華の域に入らず。
故人坐上に君の文を見て、
謂へらく是れ古人なりと吁測る莫し。
新詩說き盡す萬物の情、
硬黃の小字黃庭を臨す。

古今體詩　次韻秦觀秀才見贈秦與孫莘老李公擇甚熟將入京應擧

【字解】【一】秦觀秀才　高郵の人。初の字は太虛、後、字を少游と改む。東坡、吳興に赴くとき、相陪して惠山に游ぶ。元祐中、賢良方正に薦試され、太學博士に除せらる。黃山谷の詩に、少游五十策、其言明且清とあるは、制科に應じて、策五十篇を進めたからである。唐書、選擧志に、其科之目、有二秀才一。自後、士人通稱して、之を秀才といふ。【二】孫莘老　孫覺、字は莘老、高郵の人。官、龍圖學士。王安石の爲に逐はる。安石退いて、鍾山に居るや、覺、扁舟造り訪ふ。卒するに及び、文を作

(一四)故人已去君未レ到。
空吟河畔草青青。
誰謂他鄉各異レ縣。
天遣君來破吾願。
一聞君語識君心。
(一七)短李髯孫眼中見。
江湖放(一八)浪久全(一九)眞。
忽然一(二〇)鳴驚倒人。
縱横所(二一)値無レ不レ可。
知君不レ怕(二二)新書新。
千(二三)金敝帚那堪レ換。
我亦淹(二四)留豈長(二五)算。
山中既未レ決(二六)同歸。
我聊(二七)爾耳君其漫。

故人已に去つて君未だ到らず、
空しく吟ず河畔の草青青。
誰か謂ふ他鄉各〻縣を異にすと、
天君をして來つて吾が願を破らしむ。
一たび君の語を聞いて君の心を識る、
短李髯孫眼中に見る。
江湖に放浪して久しく眞を全うす、
忽然として一鳴せば人を驚倒せん。
縱横値ふ所可ならざるなし、
知る君が新書の新なるを怕れざることを。
千金敝帚那ぞ換ふるに堪へん、
我も亦淹留す豈長算ならんや。
山中既に未だ同じく歸るを決せず、
我聊か爾るのみ君其れ漫とせよ。

(一)故人坐上云云　故人は李公擇をいふ。唐書、員半千の傳に、武后謂二半千一曰、久聞二爾名一、謂爲二古人一、乃在レ朝邪。【一二】謂是古人云云　唐、薛用弱の集異記に、岐王以二王維詩一薦二於太平公主一、主曰、此皆見所レ誦、嘗謂、古人佳作、乃子之爲乎。【一三】硬黃小字臨二黃庭一　王注に、公言、嘗於二秘書閣一觀二王羲之墨蹟一、皆唐人硬黃紙臨本、惟鸞翠一帖、似二獻之眞筆一。唐の法帖、皆、硬黃紙を用ひて臨す。【一四】故人已去　李公擇去つて、少游未だ至らざるをいふ。【一五】河畔草青青　古詩に、青青河畔草、鬱鬱園中柳。古樂府の飲馬長城窟行に、青青河畔草、緜緜思二遠道一。【一六】他鄉各異レ縣　同じく古樂府に、他鄉各異レ縣、展轉不二相見一。【一七】短李髯孫　短李は公擇を指し言ひ、髯孫は莘老を指し言ふ。吳錄に、張遼問二吳降人一、髯將軍爲レ誰、曰孫會稽也。舊注、世說を引いていふ、郗超爲二桓溫參軍一、王珣爲二主簿一、府中語曰、髯參軍、短主簿。邵長衡いふ、短李謂二公擇一、髯孫謂二莘老一、借二用李紳・孫會稽事一耳、舊注非と。唐の李紳、字は公垂、人と爲り、短小精悍、詩、最も名あり。短李と號す。孫會稽は吳の孫權をいふ。合肥の戰に、張遼、孫權の麾下に迫り、奮戰幾んど權を得んとす。【一八】放浪　氣ままにさまよふ。杜子美の詩に、優游謝康樂、放浪陶彭澤。【一九】全レ眞　文選、嵇叔夜の詩に、志在二守樸一、養レ素全レ眞。【二〇】一鳴驚倒人　史記、楚世家に、伍舉進レ諫曰、有レ鳥在二於阜一、三年不レ蜚不レ鳴、是何鳥也、莊王曰、三年不レ蜚、蜚將レ沖レ天、三年不レ鳴、鳴將レ驚レ人。【二一】無レ不レ可　唐、王勃傳に、張說論二近世文章一曰、李嶠・宋之問之文、如二良金美玉一、無二施不レ可一。【二二】新書新　三國、魏武帝紀に、自作二兵書十餘萬言一、言諸將征伐、皆以二新書一從レ事。王注にいふ、新書言二王介甫新學經義之說一也と。【二三】千金敝帚云云　魏文帝典論に、夫人善二於自見一、而文非二一體一、鮮二能備一レ善、是以各以二所レ長、相二輕所レ短一、里語曰、家有二敝帚一、享二之千金一、斯不二自見一之患也。【二四】淹留　久しく留る。楚辭、九辨に、蹇淹留而無レ成。魏文帝、燕歌行に、何爲淹留寄二他方一。【二五】長算　晉、謝安傳に、安總二關中書事一、每鎮以二和靖一、御以二長算一。【二六】聊爾耳　晉阮咸傳に、未レ能レ免レ俗、聊復爾耳。【二七】君其漫　唐、元結傳に、自稱二浪士一、及レ有レ官、人以爲レ浪者、亦漫爲レ官乎。又曰く、公漫久矣、可二以レ漫爲レ叟。

りて誅す。人、其の德量に服す。【三】李公擇　李常、字は公擇、建昌の人。少うして兄弟と書を廬山の白石僧舍に讀む。既に第し、抄する所の書萬卷を室に留め、名けて李氏山房といふ。【四】夜光明月云云　史記、鄒陽傳に、鄒陽曰、明月之珠、夜光之璧以レ暗投二人於道路一、人無不二按レ劍相眄一者、何則無レ因而至レ前也。【五】逢レ年遇合　史記、佞倖傳に、力田不レ如レ逢レ年、善仕不レ如二遇合一。【六】百無レ憂　杜子美の詩に、吾知二徐公百不レ憂一。【七】百戰竟不レ侯　前漢書、李廣傳に、廣與二望氣王朔一語曰、自二漢擊二匈奴一、廣未二嘗不レ在二其中一、而自二諸校尉一已下、材能不レ及レ中、以二軍功一取レ侯者數十人、廣不レ爲レ後レ人、然終無二尺寸功一、以得二封侯一者、何也、豈吾相不レ當レ侯耶。李太白詩に、本家隴西人、先爲二漢邊將一、苦戰竟不レ侯、當年頗悒悵。【八】伯郎　三輔決錄に、孟佗、字伯郎。一斗得二涼州一、續漢書に、扶風孟佗以二蒲萄酒一一斗一遺二張讓一、卽得二涼州刺史一。【九】翹レ關負レ重　唐書、選擧志に、武后長安二年、始置二武擧一、有二馬槍翹レ關負レ重身材之選一。鄉試の式に中るものを武擧人といひ、亦、武擧と稱す。翹關は門をあげることで、力の強きにいふ。【一〇】紛華　繁華といふに同じ。漢書、食貨志に、奇麗紛華、非二其所レ習。【一一】故人坐上云云　故人は李公擇をいふ。唐書、員半千の傳に、武后謂二半千一曰、久聞二爾名一、謂爲二古人一、乃在レ朝邪。【一二】謂是古人云云　唐、薛用弱の集異記に、岐王以二王維詩一薦二於太平公主一、主曰、此皆見所レ誦、嘗謂、古人佳作、乃子之爲乎。【一三】硬黃小字臨二黃庭一　王注に、公言、嘗於二秘書閣一觀二王羲之墨蹟一、皆唐人硬黃紙臨本、惟鸞翠一帖、似二獻之眞筆一。唐の法帖、皆、硬黃紙を用ひて臨す。【一四】故人已去　李公擇去つて、少游未だ至らざるをいふ。【一五】河畔草青青　古詩に、青青河畔草、鬱鬱園中柳。古樂府の飲馬長城窟行に、青青河畔草、緜緜思二遠道一。【一六】他鄉各異レ縣　同じく古樂府に、他鄉各異レ縣、展轉不二相見一。【一七】短李髯孫　短李は公擇を指し言ひ、髯孫は莘老を指し言ふ。吳錄に、張遼問二吳降人一、髯將軍爲レ誰、曰孫會稽也。舊注、世說を引いていふ、郗超爲二桓溫參軍一、王珣爲二主簿一、府中語曰、髯參軍、短主簿。邵長衡いふ、短李謂二公擇一、髯孫謂二莘老一、借二用李紳・孫會稽事一耳、舊注非と。唐の李紳、字は公垂、人と爲り、短小精悍、詩、最も名あり。短李と號す。孫會稽は吳の孫權をいふ。合肥の戰に、張遼、孫權の麾下に迫り、奮戰幾んど權を得んとす。【一八】放浪　氣ままにさまよふ。杜子美の詩に、優游謝康樂、放浪陶彭澤。【一九】全レ眞　文選、嵇叔夜の詩に、志在二守樸一、養レ素全レ眞。【二〇】一鳴驚倒人　史記、楚世家に、伍舉進レ諫曰、有レ鳥在二於阜一、三年不レ蜚不レ鳴、是何鳥也、莊王曰、三年不レ蜚、蜚將レ沖レ天、三年不レ鳴、鳴將レ驚レ人。【二一】無レ不レ可　唐、王勃傳に、張說論二近世文章一曰、李嶠・宋之問之文、如二良金美玉一、無二施不レ可一。【二二】新書新　三國、魏武帝紀に、自作二兵書十餘萬言一、言諸將征伐、皆以二新書一從レ事。王注にいふ、新書言二王介甫新學經義之說一也と。【二三】千金敝帚云云　魏文帝典論に、夫人善二於自見一、而文非二一體一、鮮二能備一レ善、是以各以二所レ長、相二輕所レ短一、里語曰、家有二敝帚一、享二之千金一、斯不二自見一之患也。【二四】淹留　久しく留る。楚辭、九辨に、蹇淹留而無レ成。魏文帝、燕歌行に、何爲淹留寄二他方一。【二五】長算　晉、謝安傳に、安總二關中書事一、每鎮以二和靖一、御以二長算一。【二六】聊爾耳　晉阮咸傳に、未レ能レ免レ俗、聊復爾耳。【二七】君其漫　唐、元結傳に、自稱二浪士一、及レ有レ官、人以爲レ浪者、亦漫爲レ官乎。又曰く、公漫久矣、可二以レ漫爲レ叟。

【題義】此詩は元豐元年四月の作、秦觀が贈られた夜光明月非レ所レ投の詩に和したのである。王文誥いふ、此少游自レ徐赴レ京應レ舉、過レ宋見二子由一所レ贈詩云云と。秦少游の淮海集原作詩に、人生異レ趣各有レ求、繫レ風捕レ影祇懷レ憂、我獨不レ願萬戶侯、惟願一識二蘇徐州一、徐州雄偉非二人力一、世有二高名一擅二區域一、珠樹三株詎可レ攀、玉海千尋眞莫レ測、一昨秋風動二遠情一、便憶二鱸魚一訪二洞庭一、芝蘭不二獨庭中秀一、松柏仍當二雪後青一、故人持レ節過二鄉縣一、敎以二東來一償レ所レ願、天上麒麟昔漫聞、河東鸞鳳今纔見、不下將二俗物一礙上天眞、北斗以南能幾人、八礎學士風標遠、五馬使君恩意新、黃塵冥冥日月換、中有二盈虛一亦何算、據レ龜食レ蛤暫相從、請結二後期一游二汗漫一。王文誥いふ、李公擇自レ徐過二淮上一、而少游因携二其書一以來、故詩有二故人持節一句一云云と。紀昀は此詩を評して、轉韻是七古初格、然東坡與二此種一不二甚宜一、以下其主二於宛轉流利一、不下便二馳驟一故也と言つて居る。

【詩意】秦少游は思ひ掛けなく長篇を投じ來る。明月の珠も、夜光の璧も、暗中を以て人に投ずると、人が驚いて、劍を按じて相眄ないものはないといふ。今、少游の投は、所謂暗投ではない。諺にいふ、力田は年（豐年）に逢ふに如かず、善仕は遇合に如かずと。今、年に逢ひ、又、遇合もしたので、百も憂がない、昔、李將軍は、漢の邊將となつて、百戰したが、運が拙くて、封侯を得なかつた。之に反し扶風の孟伯郎は、蒲萄酒一斗を張讓に遺つて、涼州の刺史を得た。さて鄉試の式に中るものを、武擧と稱するが、武擧には馬槍・翹關・負重など身材の選がある。關を翹げ、重を負ふには、君に力がない。そして君は幾んど十年間も、繁華の地に入らなかつた。昔、武后は員半千に謂つていふ、久しく爾の名を聞いて、古人と思つて居たが、乃ち朝廷に在るのかと。今、故人（李公擇を指す）の坐上に君の文章を見、心に謂へらく、これは古人の佳作であらう。君の文章であるとは思はなかつた。ああまことに測り難いのである。君の新しい詩は、萬物の情を說き盡くして居る。又、君は硬黃紙を以て小さな文字で黃庭經を手習した。唐の法帖は、皆、硬黃紙を用ひて之を臨した。故人の李公擇は、已に此處に見えたが君（少游）はまだ來ない。空しく青青たる河畔の草、鬱鬱たる園中の柳の古詩や、青青たる河畔の草、緜緜として遠道を思ふの古樂府を吟ずる。誰か謂ふ、他鄉各〻縣を異にし、展轉相見ずなどと。天は君をして來つて我が願を破らしめる。一たび君の語を聞いて、君の心を識る。又、短李と髯孫とを眼中に見る。短李は公擇をいひ、髯孫は莘老をいふ。李紳と孫會稽とのことを借り用ひたのであらう。唐の李紳は人と爲り、短小精悍で、最も詩名がある。孫會稽は吳の孫權である。張遼が吳の降人に問ふ、髯將軍を誰とする。曰く、孫會稽なりと。江湖に放浪して、素を養ひ眞を全うする。一たび鳴けば人を驚倒せしめる。そして縱橫値ふ所、可ならざるはない。我は君が新書の新を怕れないことをよく知つて居る。新書とは王安石の新學經義の說を指したのであらう。文人は各〻所長を以て所短を輕んずる。里語にも家に弊帚あり、之を千金に享すといふことがある。弊帚は破れた箒、享は比べることである。此は自ら見ざるの患である。千金と敝帚と、那ぞ換へるに堪へようぞ。我も亦、淹留して他方に寄す、決して長算ではない。山中、未だ同じく歸るを決しない。未だ俗を免れることが出來ない。聊か復、爾るのみ。君其れ之を漫とせよ。

僕曩於長安陳漢卿家。見吳道子畫佛。碎爛可惜。其後十餘年。復見之於鮮于子駿家。則已裝背完好。子駿以見遺。作詩謝之。

僕曩に長安の陳漢卿の家に於て、吳道子の畫佛を見る。碎爛惜むべし。其後十餘年、復之を鮮于子駿の家に見る。則ち已に裝背完好。子駿以て遺らる、詩を作りて之を謝す

貴人金多身復閒。
爭買書畫不計錢。
已將鐵石充逸少。
更補朱絲爲道元。
煙薰屋漏裝玉軸。
鹿皮蒼壁知誰賢。
吳生畫佛本神授。
夢中化作飛空仙。

貴人は金多く身も復閒なり、
爭うて書畫を買うて錢を計らず。
已に鐵石を將て逸少に充て、
更に朱絲を補うて道元となす。
煙薰屋漏玉軸を裝ひ、
鹿皮蒼壁知る誰か賢なるを。
吳生の畫佛は本神授、
夢中化して飛空仙と作る。

覺來落筆不經意。
神妙獨到秋毫顚。
昔我長安見此畫。
歎息至寶空潸然。
素絲斷續不忍看。
已作蝴蝶飛聯翩。
君能收拾爲補綴。
體質散落嗟神全。
誌公彷彿見刀尺。
修羅天女猶雄妍。
如觀老杜飛鳥句。
脫字欲補知無緣。
問君乞得良有意。
欲將俗眼爲洗湔。

覺め來つて筆を落して意を經ず、
神妙獨り到りて秋毫顚す。
昔我長安に此畫を見、
至寶を歎息し空しく潸然。
素絲斷續看るに忍びず、
已に蝴蝶と作つて飛んで聯翩。
君能く收拾して補綴を爲し、
體質散落神の全きを嗟く。
誌公彷彿刀尺を見、
修羅天女猶ほ雄妍。
老杜飛鳥の句を觀るが如し、
脫字補はんと欲して緣なきを知る。
君に問ふ乞ひ得て良に意あり、
俗眼を將て洗湔を爲さんと欲す。

【字解】【一】陳漢卿　歐陽文忠集に、陳漢卿、字師魯、閬中人、累遷尚書虞部員外郎、好古書奇畫、每傾貲購之。王文誥いふ、元祐元年、公在詳定局、陳漢卿以地黃煎寄公、見本集書中。【二】吳道子畫佛　米元章畫史に、蘇子瞻家、收吳道子畫佛及侍者誌公十餘人、破碎甚、而當面一手精彩勁人、點不加墨、口淺深量成、故最如活、元章所記卽此畫也。【三】鮮于子駿　時に京東西路轉運使なり。【四】貴人金多　史記に、蘇秦謂其嫂曰、何前倨而後恭也、曰、見季子位高金多也。【五】將鐵石充逸少　東坡の自注に、股鐵石、梁武帝時人、今、法帖大王書中、有鐵石字。尙書故實に、千字文、梁、周興嗣編次、而有王右軍書者、乃梁武敕諸王書、令股鐵石於大王書中、搨一千字不重者、每字片紙雜碎無序、武帝召興嗣韻之。【六】補朱絲爲道元　東坡自注に、世所收吳道子畫、多朱絲筆也。朱絲は唐末の人、畫を善くす、書畫補遺に、朱絲、長安人、工畫佛像。【七】煙薰屋漏　米元章畫史に、眞絹色淡、雖百破而色明白、精神彩色如新、惟、佛像多經香煙薰損本色。法書苑に、顏魯公與懷素同學草書於郭兵曹、或問、張長史見公孫大娘舞劍器、始得低昂回翔之

貴人一見定羞怍。　貴人一見定めて羞怍、
錦囊千紙何足捐。　錦囊千紙何ぞ捐つるに足らん。
不須更用博麻縷。　須ひず更に用ひて麻縷を博するを、
付與一炬隨飛烟。　一炬に付與して飛烟に隨ふ。

蒼璧直數千、而其皮薦反四十萬、本末不相稱。【九】神授　岑參の詩に、英雄若神授、大材濟時危。【一〇】不經意　韓退之の石鼎聯句序に、軒轅道士聞劉師服・侯喜聯句、因高吟、初不似經意、詩旨有似識喜。【一一】神妙　畫斷有神品妙品。【一二】潸然　詩、小雅、大東の篇に、唁言顧之、潸焉出涕。韓詩外傳に、邦人潸然而涕下。【一三】蝴蝶飛聯翩　小說に、一道人爲戲術、碎翦綵作蝴蝶而飛、少選（環舞する）復如故、或藏其一蝶、綵亦爵、如蝶之大。裴硎傳奇に、太和中、陶太白・尹子虛、游嵩華、遇天仙、與之飲、既別、但覺超然而所衣之衣、因風若花片蝶翅、而揚空耳。【一四】收拾　韓退之の高閑上人序に、委靡潰敗、不可收拾。【一五】補綴　禮記、內則に衣裳綻裂、紉箴請補綴。【一六】誌公彷彿見刀尺　傳燈錄に寶誌禪師、金城人也、姓朱氏。又いふ、寶誌禪師、宋太始初、忽居止無定、飲食無時、髮長數寸、徒跣執錫杖、頭擐翦刀尺銅鑑、或挂二兩尺帛、或歌或詠詞、如讖記、士庶皆共事之。【一七】修羅　阿彌陀經に。天人阿修羅。維摩經注に、阿修羅、男醜女端、正有大勢力、常與天共鬪、此神、果報最勝、鄰次諸天、而非天也。【一八】老杜飛鳥句　一過の字を脫すること。六一詩話に見ゆ。歐陽公詩話に、陳從易舍人、偶得杜集舊本、文多脫誤、至送蔡都尉詩云、身輕一鳥、其下脫三一字、陳公與數客各用一字補之、或云疾、或云落、或云起、或云下、其後得一善本、乃是身輕一鳥過、陳公歎服、以爲雖一字、諸君亦不能到也。【一九】錦囊千紙云云　晉史に、世人或有貴置錦囊玉軸、以爲珍祕、開之或笑倒。【二〇】博麻縷　王注にいふ、似祖語麻三斤之類、以佛畫尋超出故、然與作意違矣、自謂其詩不足貴也と。查注にいふ、言、貴人所蓄書畫、多贋物、不值一錢、不足以博麻縷、正宜付之一炬而已、王注謬引佛氏麻三斤語、施氏補注復取之何也と。

狀、兵書亦有之乎、懷素以古鈔脚對、魯公曰、何如屋漏痕。屋漏痕は、懷素の語、借り用ひて、畫に漏痕あるをいふ。【八】鹿皮蒼璧　漢書、食貨志に、武帝造白鹿皮幣、令王侯朝覲必以薦璧、顏異曰、今王侯朝賀以

【題義】吳道子の佛畫を遺られたから、詩を作つて謝を道うたのである、唐宋詩醇に、以殷鐵石爲吳道子、書畫鑑賞之難、今古同然、眞不值一笑粲也、覺來落筆不經意、神妙獨到秋毫顚、寫吳生神授處、洞入玄微、末云、不須更用博麻縷、似用孟子麻縷輕重同之語、若云不須更論價之輕重耳、王注謂、博麻縷、似祖語麻三斤之類、未免曲解と。紀昀は此詩を評していふ、筆筆老重と。又いふ、吳生四句、寫出神化之境と。

【詩意】貴人は位が高く、金が多く、そして身もまた閒である。かくて嗜好は、自ら文雅の方に向ひ、頻りに書畫を買うて、而も其の價を問はない。それで兎角、贋物に欺かれ易く、鐵石の書いたものを逸少の書に充てたり、朱繇の筆に成つたものを道元の畫に補うたりする。殷鐵石は、梁、武帝時代の人である。梁の武帝は、嘗て殷鐵石をして王羲之の筆の跡に就いて一千字の重ならないものを搨さしめた。搨とは紙と墨とを用ひて、古碑法帖などを摹拓することである。さて搨した一千の文字は、字毎に片紙雜碎で、序次も何もなかつたのを、武帝は例の周興嗣をして之を韻文に綴らしめた。之が所謂千字文である。又、朱繇は唐末の人で、佛畫を善くす。世に傳はる吳道子の畫には、朱繇の筆が多いといふことである。一體眞絹に書いた畫は、色が淡く、百破しても、畫の精神や彩色は、新なるがやうである。ただ佛像は、多くは香煙を經るので、本色を薫損する。又、畫面に漏れた痕もある。それを世の好事のもの、玉軸を以て裝うて居る。昔、漢の武帝は、白鹿皮幣を造り、王侯をして朝覲するときには必ず以て璧を薦めしめた。其後、王侯の朝賀には、漸く本を忘れて末を追ひ蒼璧の直は數千

で其の皮の薦は反つて四十萬に上り、本末が相稱はないといふことである。吳生の佛畫は本、神來の筆で既に夢中に化して飛空の仙となつた。又夢が覺め、筆を落して、曾て意を經ないが、神妙は獨り到つて眞に迫り、ただ秋毫を迷はしめるのみである。（紀昀いふ、吳生四句、寫二出神化之境一と。）昔我は長安の陳漢卿が家で、此畫を見、夙に其の至寶であることを嘆美し、又其の碎爛せる狀には、空しく潸然として涕を垂れた。白い絲までも、斷續して看るに忍びない。昔、一道人が戲術をなし、絹を翦つて蝴蝶となしたが、蝴蝶は飛んで、少しく環舞すると、復故の如くになつた。或人が其の一蝶を藏くすと、絹も亦斷けて、蝶の大さだけが失はれたといふことである。君が能く之を收拾して、衣裳綻裂の處などを補綴したので、體質は散落すとも、其の神は全きことが出來た。寶誌禪師は金城の生れで、宋、太始の初め頃の人であつた。居止定まるなく、飲食も時なく、常に徒跣して錫杖を執る。頭に翦刀尺銅鑑を擐するので、彷彿として之を見る。又、詩中に天人阿修羅のことをいふと、男は醜く、女は端しい。修羅天女は、まことに雄妍といふべきである。杜子美が飛鳥の詩句は一字を脫して居る。其の脫字を補はうとするも、緣のなきを知る。歐陽公詩話に據ると、陳從易の舍人、杜集の舊本を得たが、文章に脫誤が多い。其の一例をいふと、身輕一鳥とあつて、其下に一字を脫して居る。陳公は數客と、各〻之を補つて見た。或は疾、或は落、或は起、或は下などの字を用ひたが、其後、一善本を得て見ると、乃ち是れ身輕一鳥過とあつた。陳公は歎服し、一字と雖も、諸君の力では此處に到ることが出來ないと言つたさうである。君に問うて、之を乞ひ得たのでまことに厚意が見える。かくて、俗眼を將て洗湔を爲さうとするも、貴人をして一見せしめると、定めて羞怍するであらう。世間の貴あるものは、往往贋物の書畫を錦囊玉軸に置いて、珍祕とするも、之を開けば、或は笑倒することもあらう。錦囊千紙、何ぞ捐てるに足らうぞ。初めより其の價値を認めない。貴人の蓄へる所の書畫も、多くは贋物である。もと一錢にも値しないから、以て麻縷を博ふにも足らない、止だ宜しく之を一炬に付すべきであらう。（王文誥いふ、貴人以下四句、皆指二貴人一而言と。紀昀いふ、回二繳貴人一、似レ是完密、然以レ此起、仍以レ此結、似レ詆、說二貴人一、是此篇正意、不レ如就レ畫或宕開作レ結と。）

雨中過舒(一)教授

疎疎簾外竹。(二)瀏瀏竹間雨。
窗扉靜無レ塵。几硯寒生レ霧。
美人樂二幽(三)獨一。有レ得緣レ無レ慕。(四)
坐依蒲褐禪。起聽風甌語。
客來淡無レ有。灑掃涼二冠履一。
濃茗洗二積昏一。妙香淨二浮慮一。
歸來北堂闇。(五)一一微螢度。(六)

雨中舒教授に過る

疎疎簾外の竹、瀏瀏竹間の雨、
窗扉靜にして塵なく、几硯寒うして霧を生ず。
美人幽獨を樂しみ、得るあるは慕ふなきに緣る。
坐して依る蒲褐の禪、起つて聽く風甌の語。
客來つて淡うして有るなく、灑掃冠履涼し。
濃茗積昏を洗ひ、妙香浮慮淨し。
歸り來つて北堂闇く、一一微螢度る。

此生憂患中。一餉安閒處。
飛鳶悔前笑。黃犬悲晩悟。
自非陶靖節。誰識此閒趣。

【字解】【一】舒敎授　名は煥、字は堯文。東坡、徐州に守たりし時、徐州敎授となり、詩酒談讌、歡を極む。紹聖の初、熙州に通判たり。【二】疎疎　賈島の詩に、槐雨滴疎疎。【三】瀏瀏　風疾き貌。文選、左太沖の吳都賦に、翼二颶風之瀏瀏一。謝惠連の詩に、亭亭映二江月一、瀏瀏出二谷飆一。【四】美人　王注に、美人指二言舒敎授一也。【五】幽獨　屈原の九章に、哀二吾生之無一樂兮一、幽獨處二乎山中一。陳子昂、感遇の詩に、幽獨空林色、朱蕤冒二紫莖一。【六】妙香淨二浮慮一　杜子美の詩に、明明領二處分一、一一當二剖析一。一一は猶ほ逐一といふが如し。に、秦攻レ趙、鼓鐸之音、聞二於北堂一。【七】一一微螢度　杜子美の詩に、雖レ得二一餉樂一、有レ如二聚飛蚊一。【八】北堂閣　戰國策【九】一餉　退之の詩に、雖レ得二一餉樂一、有レ如二聚飛蚊一。【八】北堂閣　戰國策少游、常哀二吾慷慨多二大志一曰、士生二一世一、但取二衣食纔足一、乘二下澤車一、騎二款段馬一、鄉里稱二善人一足矣、至レ求二盈滿一、但自苦耳、當下吾在下浪二泊萬里間一、虜未レ滅之時上。下潦上霧、毒氣熏蒸、仰視二飛鳶跕跕墮二水中一、臥念二少游平生時語一、何可レ得也。王文誥いふ、以下句、用二李斯事一證レ之、則所レ用、信馬援事也。施注引下列子說符篇、飛鳶墜二腐鼠一事上、非レ是。【一一】黃犬悲二晩悟一　史記、李斯列傳に、吾欲下與レ若復牽二黃犬一、俱出二上蔡東門一、逐下狡兎上、豈可レ得乎。【一二】誰識二此閒趣一　陶淵明の詩に、此中有二眞意一、欲レ辨已忘レ言。

【題義】雨中に舒敎授を訪問した時の作である。唐宋詩醇の評に、一種逸趣閑情、煅錬而出、自具二無上妙諦一とある。紀昀は此詩を評して淡遠有二王・韋（王維と韋應物）之意一と言つた。

【詩意】疎疎として雨は徐ろに簾外の竹に滴る。瀏瀏として風は疾く竹間の雨を吹いて去る。かくて窗の扉のあたりは、至つて靜に、塵もなく、几上の硯は寒うして、霧を生じて居る。舒敎授は、此の幽獨の地を樂しまれる。內に得る所あるは、外に慕ふ所がないからであらう。坐して蒲や褐の禪に依り、起つて甌に鳴る風の聲を聽いて居る。それで、客が時に尋ねて來るも、之を待つこと至つて淡く、之に供するにも物がない。灑掃して冠や履も涼しく、濃い茶を啜つて、積昏を洗ふ。爲に心も身も淸くなつた。妙香は人の浮慮を淨うする。歸り來つて見れば北堂は闇いが、逐一微螢が度つて、光が見える。人生は憂患の絕える時がない。併し憂患の中にも、一餉の樂、安樂の處がある。馬援は嘗て官屬に謂つて曰く、吾が從弟は常に吾の慷慨にして大志多いのを哀しみ、吾に謂ふやう、士は此世に生れ、衣食纔に足り、下澤車（轂の短い車）に乘り、款段馬（足の遲い馬）に騎り、そして鄉里に善人と稱せらるれば、それで十分である。盈滿を求めるのは但だ自らを苦しめるのみと。吾萬里の間に浪泊し、虜の未だ滅しない時に當つて、下は潦、上は霧、毒氣が熏蒸する。仰いで飛鳶の水中に墮ちるを視る。從弟が平生の語を念ふも得られないと。馬援は飛鳶の樂を前に笑つたことを悔いたのである。又、李斯が咸陽の市に腰斬されるとき、顧みて其の中子に、若と復、黃犬を牽き、狡兎を逐ふことも出來ないよと歎いたことは靑史に名高い。閑適の眞趣は、陶淵明にあらざるよりは、識り得ないであらう。

【餘錄】宋、陸游の老學庵筆記に、舒堯文、東坡公客、建炎中、（宋、高宋の年號）猶在、年九十卒と見ゆ。職官分紀に、通典、漢、郡國皆有二文學掾一、唐、府郡置二經學博士各一人一、掌下以二五經一敎上授學生上、宋無二專員一、諸州文學之職、從九品、爲二散官一とある。

次韻舒教授寄李公擇

舒教授に次韻し、李公擇に寄す

草書妙絶吾所兄。
眞書小低猶抗行。
論文作詩俱不敵。
看君談笑收降旌。
去年逾月方出書。
爲君劇飲幾濡首。
今年過我雖少留。
寂寞陶潛方止酒。
別時流涕攬君鬚。
懸知此懽墮空虛。
松下縱横餘屐齒。
門前轣轆想君車。
怪君一身都是德。

草書妙絶吾が兄とする所、
眞書小低猶ほ抗行。
文を論じ詩を作る俱に敵せず、
看る君が談笑降旌を收むるを。
去年月を逾え方に書を出で、
君の爲に劇飲して幾か首を濡す。
今年我に過り少く留ると雖も、
寂寞陶潛方に酒を止む。
別るる時流涕して君の鬚を攬る、
懸に知る此の懽の空虛に墮つるを。
松下縱横屐齒を餘し、
門前轣轆君の車を想ふ。
怪しむ君が一身は都て是れ德、

【字解】【一】李公擇　李常字は公擇、建昌の人。前に出づ。【二】妙絶　甚しくすぐれる。後漢書、張超傳に、善二於草書一、妙二絶時人一。文選、魏文帝の與二吳質一書に、妙二絶時人一。【三】小低　小低頭の意。法華經に、或復小低頭。後漢書、梁鴻傳に、無二乃欲一低頭就レ之乎。【四】抗行　晉、王羲之傳に、每自稱我書比二鍾繇一、當二抗行一、比二張芝草一、猶當二雁行一也。【五】逾レ月方出レ書　東坡自注に予去年留レ齊月餘。紀昀いふ、書音俟レ考と。合注にいふ、轉レ韻、古詩每轉二首句一、亦、皆押レ韻、今、書字、無二上聲一、未レ知二何據一。【六】劇飲幾濡レ首　華嶠譜序に、華歆能劇飲、至二石餘一不レ亂。北史、元文遙傳に、子行恭與二盧思道一交游、文遙謂一思道一、小兒白擲劇飲、甚得二師風一。易、未濟、上九の象に、飲レ酒濡レ首、亦不レ知レ節也。【七】陶潛方止レ酒　陶潛の止レ酒詩に、始覺止爲レ善、今年眞止矣。東坡の自注に、此行、公擇病レ酒、多不レ飲。【八】轣轆　車の軌道、博雅に、車軌道、謂二之轣轆一。【九】清潤淪二肌骨一　大學に、富潤レ屋、德潤レ身。論語の注に、使下之浹二於肌膚一、淪二於骨髓一上。【一〇】藍橋見二傾國一　東坡の自注にいふ、公擇有レ婢名二雲英一、屢欲レ出不レ果。裴硎傳奇に、長慶間、裴航傭二舟襄漢一、同舟有二樊夫人者一、國色也、航以二詩及珍果一獻、夫人以レ詩答曰、一飲二瓊漿一百感生、玄霜杵盡見二雲英一、藍橋便是神仙窟、何必崎嶇上二玉京一、後航歸二藍下一、經二藍橋驛一、因レ渴乞二漿于茅舍老嫗一、嫗咄曰、雲英擎二一甌漿一來、郎君要レ飲、航異レ之、俄於二莖箔下一、出二雙手一、捧レ瓷飲レ之、眞玉液也、航謂レ嫗曰、願納二厚禮一要レ之可乎、遂娶レ之、後同得レ仙去。

近レ之清潤淪肌骨。
細思還有二可レ恨時一。
不レ許藍橋見傾國。

之に近づけば清潤肌骨を淪む。
細思すれば還恨むべき時あり、
藍橋に傾國を見るを許さず。

【題義】舒堯文の詩に次韻し、兼ねて李公擇に寄せたのであるが、紀昀は此詩を評して結不レ成レ語と言つた。

【詩意】李君が草書を善くして、時人に妙絶するは、吾が常に兄として敬ふ所である。眞書は君に對して少しく低頭するも、猶ほ抗行する自信がある。王羲之は每に自ら稱す、我が書は、鍾繇に比すれば、當に抗行すべく、張芝草に比すれば、猶ほ雁行すべしと。我にも亦、此の感がある。文を論じたり、詩を作つたりするに至つては、俱に君には敵しないので、談笑しながら、降旌を收める君を看るのである。我は去年、齊に留まること月餘、月を逾えて方に書を出で、君の爲に劇飲して、幾たびか首を濡した。（首を濡すとは、易に酒を飲み、首を濡ほす、亦節を知らないとある。）今年、君は我家

に過り、暫く逗留したが、此行、君は酒に病み、多く飲まなかつた。陶淵明の止レ酒詩に、始覺止爲レ善、今年眞止矣とあるが、淵明が酒を止めるのは眞に寂寞を感ずるであらう。李君に對しても此感がある。それで別れるときに、流涕しながら君の鬚を攬る。そして懸に此の懽びの空しくなるを知る。首を回らせば松下には縱横君が屐齒の跡がある。又、門前の軌道に君の車を想ふ。君が一身は、都て是れ德で、之に近づけば、清潤にして肌骨を淪める。所謂富は屋を潤ほし、德は身を潤ほすものである。さて細思すれば、また恨むべきものがある。卽ち藍橋に傾國を見てはならない。（昔裴航が舟中に樊夫人を見、詩及び珍果を獻ずると、夫人は詩を以て答へていふ、一飲二瓊漿一百感生、玄霜杵盡見二雲英一、藍橋便是神仙窟、何必崎嶇上二玉京一と。後、航は輦下に歸り、藍橋驛を經、渴に因つて漿を茅舍に乞ひ、果して雲英に遇ひ、遂に之を娶り、後、同じく仙を得て去る。此の故事を用ひたのである。）

又送二鄭戶曹一

水繞彭城樓。山圍戲馬臺。
古來豪傑地。千載有餘哀。
隆準飛上天。重瞳亦成灰。
白門下呂布。大星隕臨淮。

又鄭戶曹を送る

水は繞る彭城樓、山は圍む戲馬臺。
古來豪傑の地、千載餘哀あり。
隆準飛んで天に上り、重瞳亦灰となる。
白門に呂布を下し、大星臨淮に隕つ。

尙想劉德輿。置レ酒此徘徊。
爾來苦寂寞。廢圃多蒼苔。
河從百步響。山到九里回。
山水自相激。夜聲轉風雷。
蕩蕩淸河壖。黃樓我所開。
秋月墮二城角一。春風搖二酒杯一。
遲レ君爲二座客一。新詩出二瓊瑰一。
樓成君已去。人事固多乖。
他年君倦游。白首賦二歸來一。
登レ樓一長嘯。使君安在哉。

【字解】【一】鄭戶曹　名は僕、字は彥能、彭城の人、是時、冠氏の令であつた。冠氏縣は、今の山東東臨道に屬す。戶曹は、民戶を主るの屬官。施注に、河決二府西一、檄夜下、調二急夫一、彥能方閱二保甲一、盡レ籍卽行、決遂塞、使者怒勑レ之、留守王拱辰爭二於朝一曰、徵二冠氏民一、其魚矣、猶坐二罰金一。【二】彭城樓　太平寰宇記に、魏刺史王延明、移二彭祖廟於子城東北樓下一、爲二彭祖樓一。王注に、徐州彭城縣、以二彭祖一而得レ名、按二寰宇記一、殷之賢臣彭祖、顓頊之玄孫、至二殷末一、壽七百六十七歲、今墓猶存、故邑號二大彭一。【三】戲馬臺　元和郡縣志に、戲馬臺在二彭城縣南一里一、項羽所レ造、戲二馬於此一。【四】豪傑　淮南子に、知過二萬人一、謂二之英一、千人謂二之俊一、百人謂二之豪一、十人謂二之傑一。【五】餘哀　文選、王仲宣、七哀の詩に、悲歎有二餘哀一。【六】隆準　漢書、高祖紀に、高祖隆準

而龍顏、豐邑、中陽里人也。隆は高、準は鼻梁。【七】飛上レ天　古詩に、破鏡飛上レ天。盧仝の詩に、臣血肉身、無レ由ニ飛上レ天。【八】重瞳　史記、項羽贊に、舜目蓋重瞳子、項羽亦重瞳子。【九】成レ灰　李太白の詩に、此人已成レ灰。史記、項羽紀に、羽敗ニ垓下一。徐廣いふ、在ニ沛之淺下一と。【一〇】白門下ニ呂布一　後漢、呂布傳に、自號ニ徐州牧一、曹操攻ニ呂布於下邳城一、布登ニ白門樓一、攻圍レ之急、乃下。樓は城の南門である。酈道元の水經注に、沛南門、謂ニ之白門一。【一一】大星隕ニ臨淮一　王注に、臨淮王李光弼、鎮ニ徐州一、廣德二年、有ニ大星一、殞ニ其地一、而光弼卒。唐、李光弼傳に、封ニ臨淮郡王一、復歸ニ徐州一、遇レ疾薨。杜子美の武衛將軍挽詞に、嚴警當ニ寒夜一、前軍落ニ大星一。【一二】劉德輿　南史に、宋、高祖本紀に、武皇帝、諱裕、字德輿、小字寄奴、姓劉氏、初封ニ宋公一、居ニ彭城一、嘗九日讌ニ戲馬臺一。文選に、謝宣之が從ニ宋公戲馬臺一詩がある。【一三】徘徊　漢書、高后紀に、徘徊往來。庾信が詩に、徘徊出ニ桂苑一。【一四】從ニ百步一響　卽ち百步洪である。【一五】到ニ九里一回　太平寰宇記に、元中記を引いていふ、彭城有ニ九里山一、有レ穴潛通ニ琅邪一、又通ニ王屋一、呼爲ニ黃池穴一。【一六】山水自相激云云　韋應物の詩に、水性自云靜、石中固無レ聲、如何兩相激、雷轉空山鳴。【一七】蕩蕩　水勢の大なる貌。書、堯典に、蕩蕩懷レ山襄レ陵。【一八】清河壖　山東の大清河、亦、清河といふ。或は專ら名けて清といふ。卽ち古の濟水である。壖は岸邊の地。【一九】黃樓我所レ開　子由、黃樓賦の敍にいふ、熙寧十年秋、河決ニ於澶淵一、水及ニ彭城下一、子瞻適爲ニ彭城守一、廬ニ於城上一、調ニ急走一、發ニ禁卒一、以從レ事、以レ身率レ之、故水大至、而民不レ潰、於レ是、卽ニ城之東門一、爲ニ大樓一焉、壘以ニ黃土一、日、土實勝レ水、徐人相勸成レ之、卽此也。【二〇】遲レ君爲ニ座客一　文選、謝靈運の南樓遲レ客詩に、登臨爲レ誰思、臨レ江遲ニ來客一。遲は去聲。後漢、呂布傳に、謂ニ劉備一曰、卿爲ニ坐上客一、我爲ニ降虜一。【二一】瓊瑰　劉禹錫の詩に、每レ逢ニ詞客一窘ニ瓊瑰一。瑰は美玉。詩句などの秀れたるに喩ふ。【二二】登レ樓長嘯　晉、劉琨傳に、在ニ晉陽一爲ニ胡騎所レ圍、城中窘迫、琨乃乘レ月登レ樓清嘯、賊聞レ之、悽然棄レ圍走。白樂天の垂釣詩に、臨レ水一長嘯。【二三】使君安在哉　阮嗣宗の詠懷詩に、駕言發ニ魏都一、南向望ニ吹臺一、簫管有ニ遺音一、梁王安在哉。

【題義】此詩は鄭彥能が大名府の戶曹となつて赴任するを送つたのである。紀昀いふ、曲折往復、極有ニ情思一、遲レ君四句、猶是人意所レ有、他年一轉、匪ニ夷所レ思と。

【詩意】水は徐州の彭城樓を繞つて居る。彭城といふは、殷の賢臣彭祖に因みがあるので、其の名を得た。彭城縣の南一里に、戲馬臺といふがある。項羽の築いた臺で、山に圍まれて居る。彭城の地は、古來、多くの豪傑が出た地で、首を回せば、千載餘哀がある。卽ち漢の高祖は、豐邑、中陽里の人で隆準にして龍顏であつた。隆準は鼻柱の高いことである。(一說には、頰顴)さて隆準龍顏の人は、飛んで天に上り、之に從はんとするも、由がない。舜の目は重瞳、項羽も亦、重瞳子、重瞳子の項羽は垓下に敗れ、其身は已に灰となつた。又、白門樓は沛の南門である。曹操が呂布を下邳城に攻めると、布は此の白門樓に登つたが、遂に曹操に降つた。臨淮王李光弼は、徐州を鎭したが、大星が其地に殞ちると、間もなく光弼も卒んだのである。宋の武皇帝劉德輿は、初め、宋公に封ぜられ、彭城に居たが、嘗て戲馬臺に酒宴を開いたことがある。宴酣に、徘徊往來した古が懷はれる。其後、世は移りて臺も甚だ寂寞に、廢圃、多くは蒼苔を生じ、人をして情に堪へざらしめる。さて河水は百步洪のあたりより響き、又、彭城の九里山には穴があつて琅邪に通ずる。所謂黃池穴である。水の性は靜で、石の中に在つて、固より聲がない。併し石と水とが相激すると、雷の轉ずるが如く空山に鳴る。卽ち山水自ら相激し、夜聲風雷を轉ずるのである。蕩蕩として水勢の大なるは清河の畔、卽ち古の濟水である。熙寧十年の秋、河水は、澶淵で決れた。爲に水は彭城の下まで及んだ。東坡は彭城の守であつたが、城上に廬して治水の事に從つたから、水が大に至つても、民は少しも潰えなかつた。それで城の東門に大樓を爲つて、黃土を塗つた。土が實つれば水に勝つ意であらう。これが卽ち東坡の開いた黃樓

である。秋の月は城角に墮ち、春風は酒杯に搖ぐ。四時の眺望は、此樓に集まる。君を此樓に待つて座上の客となし、瓊瑰のやうな秀れた詩句も示されたが、樓纔に成つて、君は已に去る。人事は固より乖いて、意のやうに運ばない。されば他日、君も遊びに倦み、白首となつて歸去來を賦し、此樓に登つて、一たび長嘯するときは、徐州の今の使君（刺史）たる我は、果して安くに在るやら、念うて茲に到ると、人生の定めなき、黯然たらざるを得ない。

次韻黃魯直見贈古風二首

黃魯直贈らるる古風に次韻す　二首

嘉穀臥風雨。稂莠登我場。嘉穀風雨に臥し、稂莠我が場に登る。
陳前漫方丈。玉食慘無光。前に陳ぬ漫りに方丈、玉食慘として光なし。
大哉天宇間。美惡更臭香。大なるかな天宇の間、美惡更ょ臭香。
君看五六月。飛蚊殷回廊。君看よ五六月、飛蚊回廊に殷なり。
茲時不少假。俯仰霜葉黃。茲時少しも假さず、俯仰霜葉黃なり。
期君蟠桃枝。千歲終一嘗。君に期す蟠桃の枝、千歲終に一たび嘗む。
顧我如苦李。全生依路旁。顧ふに我は苦李の如く、生を全うして路旁に依る。
紛紛不足道。悄悄徒自傷。紛紛道ふに足らず、悄悄徒らに自ら傷む。

【字解】【一】黃魯直　名は庭堅、分寧の人、李公擇の甥、孫莘老の壻。進士に擧げられ、北京國子監に教授す。元祐の初、召されて校書郎となり、神宗實錄を修む。紹聖中、出でて守となる。實錄詆誣を以て、黔州に安置せらる。遷謫を以て意に介せず。蜀の士、墓うて之に從つて游ぶ。魯直、學問文章、天成性得、詩に於て、尤も高く、書法を善くして、自ら一家を成す。張文潛・秦少游・晁无咎と、元祐の四學士と號す。初、灣皖山谷寺に游び、其の林泉を樂しみ、因て自ら山谷道人と號す。【二】嘉穀臥風雨　書に、農殖嘉穀。杜子美の贈蜀僧詩に、天涯歇滯雨、一粺稻臥不翻。【三】稂莠　毛詩に、既堅既好、不稂不莠。稂莠は、禾穀を害する惡草。【四】陳前漫方丈　坐の前に方一丈の食饌を陳ねるをいふ。孟子、盡心下篇に、食前方丈云云。韓詩外傳に、食方丈於前、所甘、不過二肉。漢書、嚴助傳に、重五味、方丈於前。【五】玉食慘無光　書、洪範に、惟辟玉食。前漢書に、陳咸、奢侈玉食、師古の注に、玉食、美食如玉也と。杜子美の病橘の詩に、此物歲不稔、玉食失光輝。【六】天宇間　文選、謝靈運、鄴中の詩に、會同庇天宇。【七】美惡更臭香　莊子、知北游に、神奇復化爲臭腐、臭腐復化爲神奇。【八】君看五六月　王文誥いふ、公答詩、在五月之後也と。【九】不少假　史記、荆軻傳に、願大王少假借之。【一〇】蟠桃枝　山海經に、東海有山、名度索、上有大桃、蟠屈三千里名蟠桃。【一一】千歲終一嘗　漢武故事に、東郡送短人、指東方朔曰、王母種桃三千歲一結子、此兒已三過偸之矣。又いふ、西王母、以桃食帝、帝欲留核種之、王母笑曰、此桃一千年生花、一千年結實、人壽幾何、遂止。【一二】苦李全生依路旁　晉、王戎傳に、嘗與羣兒戲於道側、見李樹多實、等輩競趨之、戎獨不往、或問其故、戎曰、樹在道邊、而多子、必苦李也、取之信然。【一三】紛紛不足道　史記、陳平世家に、天下紛紛、何時定乎。【一四】悄悄徒自傷　詩國風に、憂心悄悄、慍于羣小。

【題義】此詩は元豐元年四月の作。黃庭堅が京より書を贈られ、幷せて古風二首を贊とした。東坡は其の書に答へ、其の詩に次韻したのである。紀昀いふ、二詩、綽有古意と。魯直の詩、其一にいふ、江梅有佳實、託根桃李場、桃李終不言、朝露借恩光、孤芳忌皎潔、冰雪空自香、古來和鼎實、此物升廟廊、歲月坐成晚、煙雨青已黃、得升桃李盤、以遠初見嘗、終然不可口、擲棄官道傍、

但使二本根在一、棄捐果何傷、其二にいふ、青松出二洞壑一、十里聞二風聲一、上有二千歳苓一、小草有二遠志一、相依在二平生一、醫和不レ竝レ世、深レ根且固レ蔕、人言可レ醫國、何用太早計、小大才則殊、氣味固相似。

【詩意】農夫は辛苦して、嘉穀を植うるも、嘉穀は遂に風雨の爲に臥した。稂莠を養ふものは、禾稼を傷める。今、稂莠は、我が禾稼の場に登つて、而も處得顔である。坐の前には、方一丈の食饌が陳ねてある。玉の如き美食も、今は慘として其の光を失ふ。稂莠が禾稼を害したからである。今の小人の君子に勝つは、恰も此の稂莠の嘉穀を奪ふやうなものである。併し天宇の間、美と惡とは、更る更る臭となり香となる。神奇は復、化して臭腐となり、臭腐は復、化して神奇となる。君看よ、五六月の夏の頃、飛ぶ蚊は、縱横して回廊に盛で、少しも遠慮がない。秋になると、俯すも、仰ぐも、霜葉の黄ばむを見、滿目蕭條、蚊の聲も自ら息むのである。思ふに君子小人の進退も、之に類する。東海に山がある。そして山の上の大きな桃は、枝が蟠屈すること三千里、黄庭堅を此の蟠桃に比する。昔西王母は、桃を漢の武帝に與へて之を食はしむ。帝は核を留めて之を種ゑようとすると、王母は笑つていふ、此の桃は一千年に花を生じ、一千年に實を結ぶ。人壽は幾何ぞと。帝は遂に種うることを止めたといふことである。蟠桃の枝も千歳終に一たび之を嘗める。顧ふに我身は苦い李の如くでただ生を全うして路の傍に依るのみ。もと紛紛として道ふに足らない。悄悄として徒らに自ら傷むのみである。晉の王戎は嘗て、羣兒と道の側に戲る。李樹の實の多きを見ると、等輩は競うて之に趨いたが、戎だけは獨り、往かなかつた。或人が其故を問ふと、戎曰く、樹の道邊に在つて實の多いのは、必ず苦い李であらうと。そこで、之を取つて見たら、信に其通りであつた。此の詩は此故事に據つたものである。

(一)空山學二仙子一。安意笙簫聲。
千金得二奇藥一。開視皆(三)豨苓。
不レ知市人中。自有二安期生一。
今君已度レ世。坐閲(五)霜中蔕。
摩挲古銅人。歳月不レ可レ計。
(八)閲風安在哉。要レ君(九)相指似。

【字解】【一】空山學二仙子一　韓退之の謝自然の詩に、一朝坐二空室一、雲霧生二其間一、如レ聆笙竽韻、來レ自二冥冥天一。李太白の鳳笙篇に、仙人十五愛二吹笙一、學得崑邱彩鳳鳴。【二】得二奇藥一　漢、郊祀志に、始皇登二會稽一、並二海上一、幾レ遇二海中三神山之奇藥一。師古いふ、幾讀曰レ冀と。【三】豨苓　本艸衍義に、猪苓、(豨苓に同じ)行レ水之功多、久服、損二腎氣一、昏二人目一云云。韓退之の進學解に、訾二醫師一、以二昌陽一引レ年、欲レ進二其豨苓一也。王荆公の詩に、物外眞游來二几席一、人間榮願付苓通。【四】安期生　前漢、郊祀志の注に、安期生、琅邪人、賣二藥東海邊一、時人皆言二千歳公一。史記、封禪書に、李少君曰、安期生仙者、通二蓬萊中一、合則見レ人、不レ合則隱。漢、劉通傳に、善二齊人安期生一、生嘗于二項羽一、羽不レ能レ用二其策一。【五】度レ世　楚辭、屈原遠遊章に、欲二遠度レ世以忘レ歸兮、意恣睢以

担橋。【六】霜中帶　文選、謝玄暉の詩に、翩如二秋帶一。【七】摩挲古銅人　後漢、劉子訓傳に、人於二長安東霸城一見レ之、與二一老翁一共摩挲銅人一、相謂曰、適見レ鑄レ此、今已近二五百歲一矣。【八】閬風　山海經に、閬風之山、是謂二元圃一。【九】相指似　抒情集に、李山甫逢二塞垣宿將一詩に、年來上レ馬渾無レ力、望二見飛鴻一指似レ人。白樂天の戲二贈李判官一詩に、遙見二廬山一指似レ君。

【詩意】李太白の詩に、仙人十五吹笙を愛す、學び得たり崑邱彩鳳の鳴くをと。空山雲霧の間に、笙竽の韻を聆くが如くであるから、妄意に之を學んで、仙子に伍せんとする。（世を避ける意をいふ）昔秦の始皇帝は會稽山に登り、海上に竝ひ、海中三神山の奇藥に遇ふを冀うたが、求められなかつた。奇藥の求め難いことは、今も昔に變らない。千金を出して奇藥を得たが、開いて視れば、皆下劑の豨苓であつた。（紀昀いふ、此四句、言二誤用二小人一と。）市人の中には、自ら安期生のやうな仙人がある。それを氣付かれないのか。（紀昀いふ、此指二山谷一と。）今、君も亦、遠く世を度つて、歸るを忘れんと欲する。其の意は、恣睢（意をほしいままにして怒り視る）であつて世外に軒擧する。かくて坐に霜中の帶（花の託處）を閲する。摩挲す古の銅人、銅人があつてから、歲月のどれ程、經過したかが判らない。人が長安の東霸城で之を見、一老翁と相謂つていふやう、適〻此を鑄たのを見てから、今已に五百歲に近いと。さて閬風の仙山は何處ぞ、ここに君を要して望見し、指して相示すこととする。

【餘錄】本集の黃魯直に與ふる書にいふ、軾始見二足下詩文於孫莘老之坐上一、聳然異レ之、以爲非二今世之人一也、莘老言、此人知レ之者少、子可二爲稱一揚其名一、軾曰、此人如二精金美玉一、不レ即レ人、而人即レ之、將レ逃レ名、而不レ可レ得、然觀二其文一、以求二其爲一人、必輕二外物一而自重者、今之君子莫二能用一也、其後過二李公擇於濟南一、則見二足下之詩文一、愈多而得二其爲一人益詳、意其超逸絕塵、獨二立萬物之表一、馭レ風騎レ氣以與二造物者一遊、非二獨今世之君子所一不レ能レ用、雖レ如二軾之放浪自棄一、與レ世闊疏者一、亦莫二得而友一也、今者、辱二書詞一累幅、執レ禮恭甚、如レ見二所レ畏者一何哉、軾方以レ此求二交於足下一、而懼レ不レ可レ得、豈意レ得二此於足下一乎、古風二首、託レ物引レ類、眞得二古詩人之風一、而軾非二其人一也、聊復次韻以爲二一笑一と。また、烏臺詩話に、元豐元年二月、北京國子監敎授黃庭堅寄二書一封、幷古詩二首一與レ軾、依レ韻和答云、嘉穀臥二風雨一、至二玉食慘無一光、以譏一今之小人勝二君子一、如丙稂莠之奪乙嘉穀甲。又云、大哉天宇間、至二悄悄徒自傷一、言二君子小人、進退有レ時如二夏月蚊蝱縱橫一、至レ秋自息一、比二黃庭堅於蟠桃進必遲一、自比下苦李以二無用一全上生。又取二詩云慍二于羣臣一、以譏二諷當今進用之人、皆小人一也。

次韻答舒敎授觀余所藏墨

韻に次して舒敎授余が藏する所の墨を觀るに答ふ

異時長笑王會稽。　異時長笑す王會稽、
野鶩膻腥汙刀几。　野鶩膻腥刀几を汙す。
暮年卻得庾安西。　暮年卻つて得庾安西、

【字解】【一】異時　漢、項羽傳の注にいふ、異時、猶レ言二先時一也とある。【二】王會稽　王羲之は、會稽の內史たり。晉書に、王羲之終二會稽

自厭家雞題六紙。
二子風流冠當代。
顧與兒童爭慍喜。
秦王十八已龍飛。
嗜好晚將蛇蚓比。
我生百事不掛眼。
時人謬說云工此。
世間有癖念誰無。
傾身障籠尤堪鄙。
人生當著幾緉屐。
定心肯爲微物起。
此墨足支三十年。
但恐風霜侵髮齒。
非人磨墨墨磨人。

自ら家雞を厭ひて六紙に題す。
二子は風流當代に冠たり、
顧みて兒童と慍喜を爭ふ。
秦王十八已に龍飛、
嗜好晚に蛇蚓を將て比す。
我生百事眼に掛けず、
時人謬つて說き此に工なりといふ。
世間癖あり念ふに誰か無からん、
身を傾け籠を障ふ尤も鄙むに堪へたり。
人生當に幾緉屐を著くべき、
定心肯て微物の爲に起る。
此墨は支ふるに足る三十年、
但恐る風霜髮齒を侵すを。
人墨を磨するにあらず、墨人を磨す、

内史。【三】 臚・腥　臚は鱸と同じ。羊の臭氣、腥は魚の臭。【四】 庾・安西　家雞　晉書に、庾翼嘗爲二安西將軍、荆州刺史一。柳子厚集に、殷賢戲批二書後一、寄二劉連州一、并示二孟・嵩二童一詩一首あり、其下注にいふ、家有二右軍書一、每紙背庾翼題云、王會稽六紙、二月三十日、而其詩云、書成欲レ寄庾安西、紙背應レ勞手自題、聞道近來諸子弟、臨池尋已厭二家雞一。法書苑に、庾翼善レ草、少與二羲之一齊レ名、子弟皆學二羲之一、羲之後進、內外宗尙、翼甚不平、在二荆州一日、與二都下人一書云、兒輩賤二家雞一、愛二野雉一、皆學二逸少書一、須二吾還一當レ比レ之。【五】 冠・當代　後漢書、耿弇傳に、當代以爲レ榮。舊唐書、王維傳に、詩名冠レ代。【六】 秦王十八云云　唐、太宗紀に、武德元年、進封二秦王一。白樂天、長慶集に、七德舞

餅應未罄罍先恥。
逝將振衣歸故國。
數畝荒園自鋤理。
作書寄君君莫笑。
但覓來禽與青李。
一螺點漆便有餘。
萬竈燒松何處使。
君不見永寧第中
擣龍麝。
列屋閒居清且美。
倒暈連眉秀嶺浮。
雙鴉畫鬢香雲委。
時聞五斛賜蛾綠。
不惜千金求獺髓。

餅應に未だ罄きず罍先づ恥づべし。
逝いて將に衣を振うて故國に歸らんとす、
數畝の荒園自ら鋤理せん。
書を作りて君に寄す君笑ふ莫れ、
但覓む來禽と青李と。
一螺點漆便ち餘あり、
萬竈松を燒いて何れの處にか使はん。
君見ずや永寧第中龍麝を擣き、
列屋閒居清且つ美。
倒暈連眉秀嶺浮び、
雙鴉畫鬢香雲委ぬ。
時に聞く五斛蛾綠を賜ひ、
惜まず千金獺髓を求むるを。

云、太宗十八擧義兵一、白旆黃鉞定二兩京一。又、太宗自云、吾十八起二義兵一、二十四平二天下一、未二三十一致二太平一。【七】 蛇・蚓　晉、王羲之傳に、蕭子雲近出、擅二名江表一、然僅得レ成レ書、無二丈夫之氣一、行行若レ縈二春蚓一、字字如レ綰二秋蛇一。後、制して、唐、太宗の撰となす。【八】 不レ掛レ眼　韓退之の詩に、我老嗜二讀書一、百事不レ挂レ眼。【九】 有レ癖　古今嗜好、偏惑する所あれば、皆之を癖といふ。杜預有二左傳癖一、王濟有二馬癖一、和嶠有二錢癖一、陸羽有二茶癖一、王福畤、有二麝臭癖一。【一〇】 傾レ身障レ籠云云　晉、阮孚傳に、祖約、性好レ財、孚性好レ屐、同是累而未レ判二得失一、有レ詣レ約、見二正料二財物一、客至、屏當(敗拾して安置する)不レ盡、餘二兩小籠一以著二背後一、傾レ身障レ之、意未レ能レ平。或詣レ孚、正見二自蠟レ屐、因自歎曰、未

聞君此詩當大笑。　君が此詩を聞いて當に大に笑ふべし。
寒窗冷硯冰生水。　寒窓冷硯冰水を生ず。

レ知一生當レ著二幾緬屐一。（緬は履二つ）神道閑暢、於レ是勝負始分。【一一】定心肯爲二微物一起　管子に、定心在レ中。文選、謝靈運の還二舊園一詩に、微物豫二采甄一。微物は己が身を謙していふ、采甄は採錄といふが如し。【一二】足レ支云云　漢、食貨志に、邊食足二以支三五歲一。蔡君謨の墨說に、徐鉉云、嘗得二李超墨一挺一、與二弟鍇一共用十年乃盡。【一三】非二人磨レ墨云云　王注に、公嘗曰、吾有二佳墨七十丸一、而猶求取不レ已、不レ近レ愚耶、石昌言蓄レ墨、不レ許二人磨一、或曰、子不レ磨レ墨、墨當レ磨レ子、今、昌言墓木拱矣、墨故無レ恙。なほ、餘錄を參觀すべし。【一四】餅應未レ罄云云　詩、小雅蓼莪の篇に、餅之罄矣、維罍之恥。【一五】振レ衣　楚辭、屈原、漁父の章に、新沐者必彈レ冠、新浴者必振レ衣。【一六】鋤理　王建の詩に、良田少鋤理。【一七】來禽與二青李一　宋朝、淳化法帖に、大王書四百六十五帖、其一云、青李來禽、櫻桃日給、藤子皆囊、盛爲二佳函一、封多不生、足下所疏、云、此果佳、可二爲致レ子、當レ種レ之、此種彼胡桃、皆生也、吾篤喜レ種レ果、今在二田里一、惟以レ此爲レ事、故遠及、足下致レ此者大惠也、此號二青李來禽帖一。【一八】一螺點漆　蕭子良與二王僧虔一書に、仲將之墨、一點如レ漆。陸雲與レ兄書に、一日上二三臺一、曹公藏二石墨數十萬斤一、今送二二螺一。【一九】便有レ餘　陶淵明の詩に、傾レ身營二一飽一、少許便有レ餘。【二〇】萬竈　史記、孫武傳に、爲二十萬竈一。【二一】永寧第　唐、永寧里、王涯第也、傳云、家書多、與二祕府一侔、前世名書畫、嘗以二厚貨一鉤致、盧氏雜說云、永寧、後爲二王鍔宅一。鍔傳、但云、多蓄二貨財一。王注に、永寧第者、李駙馬第也、今士大夫家有レ墨、其上者、有二永寧賜第四字一、卽李駙馬家也。【二二】擣二龍麝一　溫庭筠の達摩支曲の詩には、擣レ麝成レ塵香不レ滅とあり。法書苑には、歐陽通矜二其書一、必以二松煙一爲レ墨、末以二眞麝一。【二三】閒居　韓退之の送二李愿二序に、粉白黛綠者、列レ屋而閒居。【二四】倒暈連眉　東齋記事に、蜀有二大慈寺壁畫、明皇按レ樂十眉圖一、倒暈、眉の名。列仙傳に、陽都女、生而連眉。西京雜記には、文君眉如レ望二遠山一。とあり。【二五】雙鴉畫蛾云云　李賀、美人梳頭歌に、纖手卻盤老鴉色、翠滑寶釵簪不レ得。杜牧之の閨情詩に、娟娟卻月眉、新蛾受二鴉飛一。南部煙花記に、虞世南の詩を載せていふ、學畫二鴉兒一半未レ成と。【二六】蛾綠　南部煙花記に、隋、煬帝、鳳舸殿脚女吳絳仙、善畫二長蛾眉一、帝悅レ之、由レ是爭爲二長蛾一、司宮吏、日供二螺子黛五斗一、號爲二蛾綠螺一。大業拾遺に、煬帝宮女爭畫二長蛾一、司宮吏且納二螺子黛五斛一、號爲二蛾螺子一、黛出二波斯國一。李賀の詩に、幽篁畫二新粉一、蛾綠橫二晚門一。【二七】千金求二獺髓一　酉陽雜俎に、吳、孫和寵二鄧夫人一、嘗醉舞、如意誤傷二鄧頰一、血流二嬌婉一、命二太醫一合レ藥、醫言得二白獺一、雜三玉與二琥珀屑一、當レ滅レ痕、和以二百金一購二得白獺一、合レ膏、痕不レ滅、左頰有二赤點一、親レ之、更益其妍。

【題義】宋、洪邁の容齋隨筆（四筆）に、東坡題二潭帖一云、吳道子始見二張僧繇畫一曰、浪得レ名耳、已而坐二臥其下一、三日不レ能レ去、庾征西初不レ服二逸少一、有二家雞野鶩之論一、後乃以爲二伯英（張芝字は伯英）再生一、今觀二其書一、乃不レ逮二子敬一遠甚、正可レ比二羊欣一耳、（羊欣、字は敬元、泰山南城の人。）庾亮及弟翼は、俱に征西將軍たり。東坡の引く所のものは翼である。東坡、又詩あり、いふ、暮年卻得庾安西、自厭二家雞一題二六紙一と。紀昀は此詩を評していふ、波瀾跌宕、長篇須二如レ此收一と。又いふ、仍繳二到本位一好、否則游騎無レ歸と。

【詩意】晉の庾翼は草書を善くし、少い時分から王羲之と書名を齊うした。文人相輕んずるは、古來の弊風で、翼は多くの子弟が羲之の書風を學び、內外又之を宗として尙ぶのを見て、心窃かに不平を抱いた。嘗て人に書を與へて、兒輩は家雞を賤しんで、野雉を愛すと訴つた。そして野鶩は生臭くて、刀や几を汙すと言つた。然るに晚年には却つて王會稽を張伯英の再生だとなし、自ら家雞を厭ひて、王會稽の書いた六紙に題言をなした。思ふに王・庾の二子の風流は、當時に冠であつたのに、顧つて書道に於て兒童と慍喜を爭つて居る。唐の太宗は、十八の時に義兵を擧げて、飛龍の如くに活き、二十四で天下を平げ、未だ三十にならないうちに、太平を致した。天下が混一し、四方に虞がなくなつたので、太宗も亦、心を翰墨に留め、嘗て筆法・指意・筆意の三說を作つて、學者に訓へる所があつた。又、

其の書に對する嗜好を言ふと、晩年に、王羲之の贊を作つて、行行、春の蚓を縈へるが如く、字字、秋の蛇を綰ねるが如しと言つた。我生は（東坡自らいふ）讀書を嗜みて、他の百事は眼に挂けない。然るに世の人は謬つて我を書道に工なりといつた。古より嗜好の偏つたことを癖といふが、癖といふものは誰にもあるであらう。杜預に左傳の癖があり、王濟に馬の癖があり、和嶠に錢の癖があり、陸羽に茶の癖があり、王福時に譽兒の癖がある。又、同じ癖でも、晉の祖約は、性、財を好み、阮孚は屐を好む。或人が祖約の許に詣ると、約は其の財物を料つて居た。客が來たから、直に之を片付けたが、皆は收拾も出來なかつた。そこで、二つの小籠に入れて、背後に著け、身を傾けて之を障つた。其の態度は如何にも鄙しむべきである。又、或人が阮孚の許に至ると、孚は自ら屐に蠟を塗つて、さて歎じていふやう、一生に幾緉（緉は履二つをいふ）の屐を著くべきか、見當がつかないと。顏色が如何にも閑暢であつた。二人の態度を察しても、其の性格の得失が解るであらう。管子も言つたやうに、定心は中に在る。中に在る定心が己の身の爲に起つて、ここに癖を生ずるのである。此墨はもと、我が癖の爲に收拾されたもので、約三十年を支へることが出來る。ただ恐れるのは、此身が支へられなく、風霜が我が髮や齒を侵すことである。故に人が墨を磨るのでなく、墨が人を磨るのである。昔、石昌言は墨を蓄へて、人の磨ることを許さなかつた。或人の曰く、子は墨を磨せずして、墨、當に子を磨すべしと。今、昌言は死んで墓木も拱する程になつたのである。併し墨は故のままで少しも恙がない。餅の罄くるは、罍の恥といふことがある。餅は形が小さく罍は大きい、皆、酒を容れる器である。餅は常に罍から酒を受ける、受ける所の盡きるのは、罍の供給が足らないからである。故に恥とする。今、餅はまだ罄きないのに、罍が先づ恥ぢる。我は將に衣を振うて故國に歸らうか。そして我が故山數畝の荒園を鋤理して見ようか。ここに書を作りて君に寄するが、君は決して笑ふな。さて吾は篤く果を種うるを喜ぶ。今、田里に在つて、此を事として居る。故にただ來禽と青李とを覓める。宋朝、淳化法帖に、大王（王羲之）の書、四百六十五帖、其の一にいふ、青李來禽云云とある。足下の此を致すは、我に取つて大なる惠みである。陸雲が兄に與ふる書に、曹公の石墨數十萬斤を藏する、今、其の二螺を送るとあるが、一點漆の如く、而も便ち餘分があるから、更に萬竈松を燒いても、何れの處にか之を使はう。君見ずや、永寧李駙馬の第中では、龍麝を擣いて塵となし、墨に入れることを。今、士大夫の家で、墨の上等なものに、永寧賜第の四字がある。卽ち李駙馬の家である。さて永寧第中では、粉白黛綠のもの、屋を列ねて閒居し、淸且つ美である。所謂倒暈眉・連眉など、宛ら遠山秀嶺を望むがやうである。又、新しい鬢は鴉兒を受けて香雲を委ねたやうである。時に五斛の蛾綠を賜ふと聞く。それは隋の煬帝の時、吳絳仙といふ侍女が善く長蛾眉を畫き、帝は特に之を悅ぶ。すると宮女は爭うて長蛾を畫いて、司宮吏は、旦に螺子黛五斛を納れ、之を蛾螺子と號したといふことである。又、吳の孫和は、鄧夫人を寵し、嘗て醉うて舞ひ、誤つて夫人の頰を傷けた。血は嬌婉に流れる。太醫に命じて藥を合せる。醫は白獺髓を玉屑に和して、瘢痕を滅した。白獺髓の價は百金である。併し美人の爲には、千金を以て獺髓を求めることを惜まない。さて君の此詩を聞かば、人は當に大に

笑ふべく、春風は坐來に生じて、寒窻の冷い硯も、氷が解けて、春水を生ずることであらう。

【餘錄】漁隱叢話に、東坡云、阮生言、未レ知一生當レ著二幾兩屐一、吾有二嘉墨七十枚一、而猶求取未レ已、不レ近レ愚耶、是可レ嗤也、石昌言蓄二李廷珪墨一、不レ許二人磨一、或戲レ之云、子不レ磨レ墨、墨將レ磨レ子、今昌言墓木拱矣、而墨故無レ恙、李公擇見レ墨輒奪、相知間抄取殆遍、近有下人從二梁許一來上云、懸墨滿レ堂、此通人之一蔽也、余嘗有レ詩曰、非二人磨レ墨墨磨レ人、此語殆可二凄然一云、苕溪云、東坡詩、乃和二舒教授觀二所藏墨一也、坡又云、吾蓄レ墨多矣、其間數枚、云是庭珪所レ造、雖二形色異レ衆、然歲久墨之亂レ眞者多、皆疑而未レ決也。陳后山の詩に、秦郎百好俱第一、烏丸如レ漆姿如レ石、巧作二松身與二鏡面一、借二美於外一非二良質一、念子何忍遽磨研、少待須更圖二不朽一、明窓淨几風日煖、有レ愁萬斛才八斗、徑須脫レ帽管城子、小試二玉堂揮翰手一。

送鄭戸曹賦席上果得榧子

鄭戸曹を送り、席上の果を賦し、榧子を得たり

彼美玉山果。粲爲金槃實。
瘴霧脫二蠻溪一。清樽奉二佳客一。
客行何以贈。一語當レ加レ璧。
祝君如二此果一。德膏以自澤。
驅二攘三彭仇一。已二我心腹疾一。
願君如二此木一。凜凜傲二霜雪一。
斲爲二君倚几一。滑淨不レ容レ削。
物微興不レ淺。此贈毋二輕擲一。

【字解】【一】鄭戸曹　名は僅、字は彥能、彭城の人。前に出づ。【二】榧子　かや。一名は枝子、常綠喬木の一。本草に、榧實、一名、玉山果。藝苑雌黃に、予與二潘伯鼎一食二榧子一、言、諸處皆不レ及二玉山者一、方悟、東坡詩語、恐是上饒玉山縣、潘云、玉山地名、在二婺之東陽縣一、所レ生榧子、香脆、與二他處一迥殊、故集韻、榧子注云、木名、有レ實、出二東陽諸郡一。【三】金槃　杜子美の詩に、況聞內金盤、盡在二衞・霍室一。衞・霍は漢、武帝の武將、衞青と霍去病。【四】瘴霧　韓退之の杏花詩に、纔開還落瘴霧中。【五】清樽　奉二佳客一　杜子美の漢中王の詩に、宿昔奉二清尊一。文選、陸士衡の詩に、俯觀二嘉客一、仰贈二玉容一。【六】何以贈　毛詩に、何以贈レ之、瓊琚玉佩。【七】當レ加レ璧　禮記に、東レ帛加レ璧、尊レ德也。左傳、僖公二十三年に、晉、重耳及曹、僖負羈饋二盤飧一寘レ璧焉。同、成公二年、韓厥執二縶馬前一、再拜稽首、奉レ觴加レ璧以進。【八】三彭仇　宣室志に、曾契虛、游二稚川一、遇二仙人一、問曰、爾絕二三彭之仇一乎、彭者三尸之姓、學レ仙者、當二先絕一三尸一、本草に、榧實去二三蟲一行二粲衞一。中黃經に、一者上蟲、居二腦中一、二者中蟲、居二明堂一、(針灸の穴)三者下蟲、居二腸胃一。名曰二彭琚・彭質・彭矯一、惡二人進レ道、喜二人退志一。【九】已二心腹疾一　本草に、孟詵云、榧多食、令二人能食一、明レ目輕レ身。左傳、哀公六年に、楚昭王曰、除二腹心之疾一、而寘二諸股肱一何益。史記、范雎傳に、秦之有レ韓、如二木之有レ蠹、人之有二心腹之病一也。【一〇】爲二君倚几一　本草に、榧一作レ榧、其木名二文木一、葉似レ杉、木如レ柏、理如二松肌一、細軟可レ爲二器用一、詩家所レ云、棐几、卽此。【一一】滑淨不レ容レ削　晉、王羲之傳に、嘗詣二門生家一、見二棐几一、滑淨、因書レ之、眞草相半、後爲二其父一誤刮二去之一、門生驚懊者累日。【一二】物微興不レ淺　杜子美の詩に、物微意不レ淺、感動一沈吟。【一三】毋二輕擲一　李太白詩に、世途自

輕擲。

【題義】鄭戸曹の大名に赴くを送る時、席上の果を賦し、榧子を得て之を詩にしたのである。紀昀いふ、開合送別、方不二是泛泛詠物一、若詠物如レ此作、則小樣極矣、言固各有レ當也と。

【詩意】榧の實は、一名を玉山果といふ。玉山は地名、婺州の東陽縣に在る。其の生ずる所の榧子は、香脆であつて、他處の產とは、迥に殊つて居る。彼の美しい玉山果は、粲として金槃の實をなして居る。韓退之の詩に、纔に開き還落つ瘴霧の中とあるが、此の玉山果も、瘴霧の蠻溪を脫して、淸樽佳客に奉ずる。さて旅路に上る君に何を贈らうか、瓊琚玉佩か、一語は當に璧を加ふべきで、君に玉山果を贈る。帛を束ね璧を加へるは、德を尊ぶの意である。ここに更めて君を祝福する、どうか此の果の如く、德膏、以て自らを澤するやうにありたい。そして、三戸蟲の仇をば驅攘して、我が心腹の疾を已めることを望む。彭は三戸の姓、三蟲とは、一は上蟲で、腦中に居る。二は中蟲で、明堂に居る。三は下蟲で、腸胃に居る。どうか、君も此木の如く、凜凜として霜雪に傲るやうに、斲つて君が倚几を爲るに、滑淨にして削ることが出來ない。昔、王羲之が一門生の家に詣つて、棐几を見たが、滑淨であつたから、之に書し、眞と草とが、相半ばした。後、其父の爲に誤つて刮り去られたといふ話がある。此詩は之に據つたのである。物は至つて微ではあるが、興は決して淺くはないから、此贈を輕しく擲つてはならない。

送胡掾

亂葉和凄雨。投レ空如レ散レ絲。
流年一如レ此。遊子去何之。
節義古所レ重。艱危方自レ茲。
他年著二淸德一。仍復畏二人知一。

【字解】【一】胡掾　字は公達、允文の子、時に徐州の獄掾たり。允文卒し、公達は憂を以て故山に歸る。王文誥いふ、胡允文之卒、無二歲月可レ考、此詩、正送二公達奉レ喪歸レ里作也云云と。【二】如レ散レ絲　張協の雜詩に、騰雲似レ湧レ煙、密雨如レ散レ絲。【三】流年一如レ此　杜子美の詩に、悠悠邊月破、鬱鬱流年度。韓退之の感春詩に、春序一如レ此、汝顏安足レ賴。【四】游子去何之　文選、李少卿の詩に、攜レ手上二河梁一、遊子暮何之とある。【五】艱危方自レ茲　杜子美の詩に、險艱方自レ茲。【六】他年著二淸德一云云　王文誥いふ、胡允文、初在レ蜀、嘗敏禮宮師、及三公爲二鳳翔幕一、而允文爲レ令、共レ事二年、時公達、尙幼齡也、故此詩所二以勉レ之者、甚至云云と。

【義】此詩は元豐元年四月、胡允文が病亡し、其の子公達、獄掾を罷め、櫬を扶けて、將に歸らうとする時の作である。紀昀いふ、不レ失二古格一、所レ乏新意、結切レ性、亦小樣と。

【詩意】古詩に騰雲は煙の湧くに似、密雨は絲を散らすが如しとあるが、亂葉の凄雨に和する狀は、大空に投じた絲の四方に散るがやうである。流れ行く年も、亦、此の如くである。旅行く人よ、此處を去つて、何くに之かれるのである。さて節義は古來、人の重んずる所である。それで艱危は、方に

これからである。他年、君も清德を著はすやうになり、仍つて、また人に知られることを畏れるであらう。

【餘錄】東坡の本集、祭二胡執中郎中一文にいふ、君少在レ蜀、從二先府君一、凡蜀之士、事レ賢友レ仁、我之知レ君、固不レ待レ見、從二事於岐一、始識二君面一、相從之歡、傾蓋百年、見二其儒子一、駒駿雛鵷（鳳凰の一種）非レ罪失レ官、君則先去、我徂二華州一、見二君逆旅一、淫雨彌レ旬、道淖沒レ車、他人爲泣、君樂有レ餘、其後七年、君掾二計省一、雖レ獲二一笑歡一、不レ逾レ頃、又復七年、我守二北徐一、君從二其子一、徐獄是書、雛鶱而翔、駒亦千里、惟我與レ君、宛其老矣、老人無レ徒、相見益親、凡昔在レ岐、今存幾人、謂君仁人、雖レ疾當レ壽、云何而然、命也難レ究、嗚呼執中、人誰不レ死、如二君之賢一、不二云止一レ此、百鍊之剛、日膾二千牛一、匣而不レ用、非二我之羞一、孺子肖レ君、世有二令聞一、送レ君一觴、永歸無レ恨。又、黃庭堅子瞻が、祭二胡屯田一文に跋していふ、庭堅晚進、不レ及レ識二執中公一、而東坡之文、敍二述自レ少迄レ老、言其事レ師取レ友、殊不二草草一、藏レ器待レ知、終不レ見レ用、可レ信二其爲一士君子一也、元祐中、余歸二妹於河南張埧一、收二和執中公一、蓋埧之外祖也、故遂識二執中公之子、峽州太守公達一、公達治レ郡、政雖レ嚴而不レ苛、事雖レ整而常暇、以レ是知下東坡之所レ云孺子肖レ君、世有二令聞一非中虛語上也、其曰二百鍊之剛、日膾二千牛一、惜乎匣二餘刃一而不レ試也、天下嘗患二才難一、有レ之又未二必用一、可レ勝レ嘆哉。

答仲屯田次韻

仲屯田に答へて韻に次す

秋來不レ見二渼陂岑一。
千里詩盟忽重尋。
大木百圍生遠籟。
朱絃三歎有二遺音一。
清風卷レ地收二殘暑一。
素月流レ天掃二積陰一。
欲レ遣何人賡二絕唱一。
滿階桐葉候蟲吟。

秋來渼陂の岑を見ず、千里詩盟忽ち重ねて尋ぬ。大木百圍遠籟を生じ、朱絃三歎遺音あり。清風地を卷いて殘暑を收め、素月天に流れて積陰を掃ふ。何人をして絕唱を賡がしめんと欲する、滿階の桐葉に候蟲吟ず。

【字解】【一】仲屯田　仲伯達、周禮、冬官に屯部あり、今、屯田司といふ。【二】渼陂　陝西、鄠縣の西にある。杜子美の詩に、岑參兄弟、皆好レ奇、攜レ我遠來游二渼陂一。唐、元澄の秦京雜記に、渼陂以レ魚得レ名。【三】詩盟忽重尋　左傳、哀公十二年に、吳子使二太宰嚭請二尋盟一。唐、崔善爲の詩に、深山容重尋。【四】大木百圍生遠籟　莊子、齊物論に、大木百圍之竅穴、泠風則小和、飄風則大和、厲風濟、則衆竅爲レ虛、地籟則衆竅是已。【五】朱絃三歎　史記、樂書に、清廟之瑟、朱絃而疏越、一倡而三歎、有二遺音一者矣。禮記にも見ゆ。西溪叢語に、大木百圍生二遠籟一、朱絃三歎有二遺音一、東坡・介甫皆有二此句一。【六】殘暑　白樂天の詩に、殘暑蟬催盡。【七】素月　文選、謝莊の月賦に、白露曖レ空、素月流レ天。【八】積陰　淮南子に、積陰之寒氣爲レ水、水氣之精者爲レ月。【九】賡二絕唱一　宋書、謝靈運論に、平子豔發、文以情變、絕唱高蹤、久無二嗣響一。【一〇】候蟲吟　時候に應じて出で鳴く蟲。柳宗元の詩に、門掩候蟲秋。

【題義】此詩は元豐元年七月の作。仲伯達の詩に次韻したのである。王文誥いふ、此七月所レ作詩也、施注原編在下前送二胡掾一之後、答二宋國博一之前上、未レ見二其誤一云云と。

【詩意】渼陂は、終南山諸谷の水を受く。唐の時代には人の採捕を禁じ、ただ百姓の灌漑に任せた。

秋となつて、水が滿ちたために、岑をば見ない。我は千里を遠しとしないで、詩友を尋ね、重ねて來り遊ぶ。百圍（兩手で相引き張るを圍といふ）もある大木の穴、それは地籟の發する所で、風が輕ければ聲小に、風が烈しければ聲大である。そして猛風一過の後は、萬竅寂然となる。試みに遠籟の生ずるを形容すると、朱絃の瑟を奏でて、一倡して三歎、古の遺音がある。清い風は地を捲いて、殘暑を收め、白い月は天に流れて、積陰を掃ふ。何人をして絶唱（秀れた詩歌）を賡がしめようとする。滿階の桐葉には候蟲が吟じて居る。

密州宋國博。以レ詩見レ紀二在レ郡雜詠。次韻答之

密州の宋國博、詩を以て郡に在る雜詠を紀せらる、次韻して之に答ふ

吾觀二宋文。字字照二縑素。
淵源皆有レ考。奇險或難句。
後來邈無レ繼。嗣子其殆庶。
胡爲尙流落。用舍眞有レ數。
當時苟悅可。愼勿笑二杕杜。
斲レ窗誰赴涑。袖レ手良優裕。
山城辱吾繼。缺短煩遮護。
昔年繆陳レ詩。無人聊瓦注。
於レ今賡絶唱。外重中已懼。
何當附二家集。擊壤追咸濩。

【字解】【一】密州宋國博　王文誥いふ、宋國博、時代二孔宗翰一守二密州一。密州は、今は縣名、河南開封道に屬す。【二】二宋文　宋郊と宋祁。國博は卽ち其嗣子。宋史に、宋庠、初名郊、字公序、安陸人、弟祁、字子京、兄弟同擧二進士一、禮部奏、祁第一、庠第三、章獻太后、不レ欲二以レ弟先レ兄、擢二庠第一一、置二祁第十一、人呼二二宋一、以二大小一別レ之、庠練二習典故一、擅二儒雅之望一、祁亦能レ文多二建白一。歐陽公、歸田錄に、宋鄭公庠、初名郊、字伯庠、與二弟祁一、自二布衣時一、名動二天下一、號爲二二宋一。【三】字字照二縑素一　唐、駱賓王傳に、開元中、張說與二徐堅一、論二近世文章一、張九齡如二輕縑素練一、實濟二時用一、而窘二邊幅一。崔塗の詩に、雕二琢文章一字字精。【四】淵源皆有レ考　漢、董仲舒傳贊曰、考二其師友一、淵源有レ漸、猶未レ及二乎游夏一。【五】無レ繼　北夢瑣言に、若及二門於孔氏一、其殆庶乎。查注にいふ、史譏、公序愛二信幼可レ謂下前無二來人一、後無中繼者上。【六】嗣子其殆庶　後漢、黃憲傳論に、若及二門於孔氏一、其殆庶乎。查注にいふ、史譏、公序愛二信幼子一、多與二小人一游上。爲二御史呂誨一所レ劾、請敕レ庠、不レ得下以二二子一隨上。子京、於二皇祐中一、亦坐下其子從二張彥方一游上、以二龍圖閣學士、出知二亳州一、則二宋之子、俱不レ能レ世二其家一者也、故先生詩中、亦多二微詞一。【七】流落　杜子美の五盤詩に、流落隨二邱墟一とあり。李太白の文に、白、隴西布衣、流二落楚漢一。【八】悅可　法華經に、言辭柔軟悅二可衆心一。【九】勿笑二杕杜一　書唐書、李林甫傳に、林甫典レ選、選人嚴迴、判語用二杕杜二字一、林甫不レ識二杕字一、謂二韋陟一、此云二杕杜一何也、陟俯レ首不二敢言一。詩、唐風に、有二杕之杜一。杕は特生の貌。杜は赤棠。【一〇】斲レ窗赴レ涑　朝野僉載に、唐、陽滔爲二中書舍人一、時促命草レ制、而吏持二門鑰一、他適、無二舊本檢視一、乃斲レ窗取レ之、時號二斲窗舍人一。【一一】袖レ手優裕　韓退之の祭二柳子厚一文に、不二善爲下斲、血指汗レ顏、巧匠傍觀、縮二手袖間一。國語に、享祀時至、而布施優裕也。【一二】缺短煩二遮護一　文選の嵇叔夜與二山巨源一絶レ交書に、仲尼不レ假二蓋於子夏一、護二其短一也、

王文誥いふ、公前有レ送二孔郎中赴陝郊一詩、今以二此聯一證レ之、宋國博、乃代二宗翰一守レ密者、確無レ可レ疑、特指出レ之と。【三】陳レ詩。禮記に命二太師一、陳レ詩、以觀二民風一。【四】瓦注　莊子、達生篇に、以レ瓦注者巧、以レ鉤注者憚、以二黃金一注者殪、其巧一也、而有レ所レ矜、則重レ外也、凡外重者内拙。【一五】擊壤追二咸薇一　藝經に、堯時擊壤、壤以レ木爲レ之、前廣後銳、長尺四寸、闊三寸、其形如レ屨、將レ戲、先側二一壤於地一、遠二三四十歩一、以二手中壤一擊レ之、中者爲レ上。高士傳に、帝堯之世、壤父擊二壤於道中一、觀者曰、大哉堯之德也、壤父曰、吾日出而作、日入而息、擊レ井而飲、耕レ田而食、帝何德二於我一哉。周禮に、大司樂以二樂舞一教二國子一、舞二大咸・大濩一。鄭氏注にいふ、大咸、堯樂、大濩、湯樂也と。

【題義】此の詩は宋國博が郡に在る時の雜詠を示されたから、次韻したのである。紀昀いふ、亦、應酬語と。

【詩意】宋郊、字は公序及び弟の祁、字は子京、此の二人の兄弟は、布衣の時分から、其の名が天下を動かし、世人は二宋と號した。試みに二宋の文章を觀るに、字字輕縑素練を照らして居る。又二宋の師友を考へるにつけても、其の文、淵源する所があるやうに思はれる。其の奇險の語や難句とする所は、後來、邈として之を繼ぐものがない。ただ二宋の子は、殆んど之に庶くて、而も俱に其の家を嗣ぐことが出來なかつた。胡爲れぞ流落（零落に同じ）して、邱墟に隨つたのであるか。之を用ふれば行ひ、之を舍てれば藏る。人の行藏は、眞に天命である。當時、言辭が柔軟であつたが、衆心を悅可するに足るものがある。杜杜の二字を識らなかつたことなど決して笑つてはならない。唐の林甫は嘗て選擧を典つた。選人嚴迥は、其の判語に杜杜の二字を用ひた。林甫は杜の字を識らない。韋陟に謂つていふ。杜杜といふは何の意であるかと、陟は首を俯して、敢て言はなかつたさうである。唐の陽滔のやうに、窓を斫つて、赴き救ふものは誰ぞ。手を袖に傍觀するは、優裕であつた。孔宗翰に代つて密州の太守となつた。山城を辱しめたと謙したのである。昔、孔夫子は途中で雨に逢つた時、蓋を子夏に假らなかつた。子夏は物惜みする人であるから、其の短所を護らうとしたからである。人の缺點短處は、どこまでも遮護を要する。我は先年、繆つて詩を陳べた。人の無いために、聊か瓦注をした譯である。瓦注とは、瓦を以て賭することである。瓦を以て注するものは巧に、鉤を以て注するものは憚り、黃金を以て注するものは殪む。凡そ外の重きものは內が却つて拙い。我が丁度、其れである。今に於て、絕唱（秀れた詩）を賡ぐのは、外が重いので、中已に懼れて居る。何れの日か、當に家集を附して、壤父が擊壤の歌（已の詩を謙していふ）を以て堯の大咸の樂や、湯の大濩の樂の後を追ふべきぞ。

答范淳甫

吾州下邑生劉季。
誰數區區張與李。
重瞳遺跡已塵埃。
惟有黃樓臨泗水。

范淳甫に答ふ

吾が州の下邑劉季を生ず、
誰か數へん區區張と李と。
重瞳の遺跡は已に塵埃、
惟黃樓の泗水に臨むあり。

【字解】【一】范淳甫　名は祖禹、成都、華陽の人。宋、費袞の梁谿漫志に、范淳甫之母、夢二鄧禹來一、而生二淳甫一、故名二祖禹、字夢得一、司馬溫公爲改二字淳甫一。【二】吾州下邑　王注にいふ、先生爲二徐州太守一、故稱一

而今太守老且寒。　而今太守老い且つ寒く、
俠氣不レ洗儒生酸。　俠氣洗はず儒生の酸。
猶勝白門窮呂布。　猶ほ勝る白門の窮呂布、
欲將鞍馬事曹瞞。　鞍馬を將て曹瞞に事へんと欲するに。

以レ此爲二小沛一。史記に、高祖十二年、破二黥布一還、過レ沛、謂二沛父老一曰、遊子歸二故鄉一、吾雖レ都二關中一、萬歲後、吾魂魄、猶樂思レ沛、且朕自沛公一、以誅二暴亂一、其以レ沛爲二朕湯沐邑一。【三】張與レ李　唐、張建封は、貞元四年に、徐・泗節度使、檢校尚書右僕射に拜せらる。李光弼は、臨淮郡王に封ぜられしなり。【四】重瞳遺迹　項羽は重瞳子。彭城に都し、西楚の霸王と號す。史記、項羽本紀の贊には、吾聞二之周生一、曰舜目、蓋重瞳子、又聞、項羽、亦重瞳子。羽、豈其苗裔乎。【五】黃樓臨二泗水一　東坡の自注には、郡有二廳事一、俗謂二之霸王廳一、相傳不レ可レ坐、僕拆レ之、以蓋二黃樓一。卻掃編に、東坡南寨、黃樓易二名觀風一。九域志に、徐州泗水、今呼爲二淸河一、水經云、泗之別名、又、泗水亭、漢高祖嘗爲二亭長一。【六】俠氣不レ洗云云　荀悅紀論に、世有二三游一、德之賊也、一曰游俠、立二氣勢一、作二威福一、結二私交一、以立二强於世一者、謂二之游俠一。漢、游俠傳、魯人、皆以レ儒敎、而朱家用レ俠聞。【七】白門窮呂布　白門は徐州の南門。魏志、呂布傳に、曹操攻二呂布下邳一、布登二白門樓一、兵圍レ之急、乃下降、布請レ操曰、明公之所レ患、不レ過二於布一、今已服矣、令二布將レ騎、明公將レ步、天下不レ足レ定也、劉備進曰、明公不レ見二布事二丁建陽・董太師一乎、操頷レ之、縊二殺布一。【八】曹瞞　阿瞞は曹操の小字である。

【題義】　范祖禹の寄せられた詩に答へたのである。東坡の自注に、來詩有二張僕射・李臨淮之句一、とある。紀昀は此詩を評していふ、意境自濶と。又いふ結言レ不二肯俯二首權貴一、用二呂布事一、以二徐州一故也と。

【詩意】　吾が徐州（東坡は徐州の太守であるから、吾州と稱したのである。）の下邑に、豐といふ地が

吾州一、漢高祖、豐邑人、今、徐州有二豐縣一、故云二下邑一。漢、高祖紀には、姓劉、字季、沛豐邑、中陽里人也。元和郡縣志には、沛縣東南至二徐州一、一百四十三里、本秦舊縣、取二沛澤一爲レ名、漢興四年改爲二沛郡一、理二相城一、

ある。それは、漢の高祖の出生地、沛の豐邑である。既に此の史蹟があるから、唐の張建封が、徐州・泗州の節度使であつたことや、李光弼が臨淮郡王に封ぜられたことなどは數へるには足りない。併し重瞳子であつた項羽の遺跡は、今は已に塵埃となつて、ただ黃樓が寂しさうに泗水に臨んで居るのみである。相傳ふ、徐州に霸王廳があつたが、漸く頹廢して、坐することが出來なかつたのを、東坡は之を拆いて黃樓を蓋うたといふことである。東坡が南竄した後、黃樓は名を觀風と易へた。さて徐州の太守、（東坡自らいふ）今は老いて且つ貧しい。世に游俠といふがある、德の賊と言はれて居る。游俠は、氣勢を立て、威福を作し、私交を結び、以て强きを世に立てて居るが、其の俠氣は、儒生の酸を洗はない。併し、かの徐州白門樓の降將であつた呂布が、窮餘、曹操に對つて、哀憐を乞ひ、其の騎將となつて、命を永らへようとしたのに比べると、勝ること萬萬であらう。（王文誥いふ、來詩以二張・李一爲レ譽、公謂、但不レ至レ如二呂布之低レ首下レ心而已、原唱、蓋皆、使二徐州事一、故其答レ之如レ此、譏下呂惠卿。曾布、雖レ黨二安石一、終無二成也、時、淳甫在二君實處一、故打二此謎謎一、以博二一笑一、否則徐事無レ不レ可レ道、必不レ用二呂布一也と。）

【餘錄】　施注に范淳甫の傳を載せていふ、范淳甫、名祖禹、成都華陽人、幼孤、鞠二於叔祖忠文公景仁一、中二進士甲科一、從二司馬溫公一修二通鑑一、在レ洛十五年、書成、溫公薦爲二正字一、元祐初、擢二右正言一、改二著作佐郎一、修二神宗實錄一、由二著作郎兼侍講一、遷二起居郎一、又召試二中書舍人一、自レ除二拾遺一、及二駁掖一（起居郎）、皆以二婦父呂正獻公秉レ政、辭不レ拜、正獻薨、乃擢二右諫議大夫一、遷二給事中禮部侍郎一、入二翰林一

爲二學士一、其論議、皆關二天下大體一、宣仁升遐、（登遐に同じ、天子の崩御、）哲宗親レ政、忠讜日聞、皆人所レ難レ言、紹述事興、言不レ見レ聽、請レ外、以二龍圖閣學士一、知二陝州一、言者論下修二實錄一詆誣上、及下嘗論二禁中雇二乳媼一事上、連貶二永賀賓化一而卒、年五十八、淳甫在二講筵一、言簡而當、無二一長語一、義理明白、東坡稱爲二講官第一一、坡與二范氏一同爲二蜀人一、而忠文敬二愛其兄弟一甚至、故與二淳甫一意好尤篤、元祐閒、在二要路一、志同道合、相與力持二國是一、俱及二南遷一、坡既北還、淳甫亦許二歸葬一、建炎間、追二復舊職一、子沖、字元長、高宗擢爲二翰林侍讀學士一、嘗事二孝宗一、初潛レ能世二其家一云。

次韻答王定國

次韻して王定國に答ふ

毎レ得二君詩一如レ得レ書。
君の詩を得る毎に書を得るが如し、
宣レ心寫レ妙書不レ如。
心を宣べ妙を寫すは書如かず。
眼前百種無レ不レ有。
眼前百種有らざるなし、
知君一以詩驅除。
知る君一に詩を以て驅除す。
傳聞都下十日雨。
傳へ聞く都下十日の雨、
青泥沒レ馬街生レ魚。
青泥馬を沒して街に魚を生ず。
舊雨來レ人今不レ來。
舊雨人を來して今來らず、
悠然獨酌臥清虛。
悠然獨り酌みて清虛に臥す。
我雖作二郡古云樂一。
我郡を作す古にいふ樂しと雖も、
山川信美非二吾廬一。
山川は信に美にして吾が廬にあらず。
願君不レ廢二重九約一。
願はくは君重九の約を廢てず、
念二此衰冷一勤二呵噓一。
此の衰冷を念うて呵噓を勤めよ。

【字解】【一】王定國　字は安禮、福安の人、紹興の末、閤を叩いて、邊宜十策を上る。高宗、金陵に幸す、復、十五事を進む。隆興の間、高郵判官と爲る。金兵と凡そ九十三戰、皆捷つ。知高郵軍に除せられる。【二】書不レ如　劉禹錫の酬二白樂天初冬早寒一詩に、兩傳千里意。文選、王正長の雜詩に、誰能宣二我心一。【三】以レ詩驅除　錢希白、滑稽集に、有二小不レ快、必伸レ之以レ文。漢、王莽傳に、聖王之驅除云爾。【四】十日雨　莊子、大宗師篇に、子輿與二子桑一友、而霖雨十日、子輿曰、子桑殆疾矣、裹レ飯而往食レ之。【五】青泥沒レ馬　杜子美の詩に、飯煮青泥沒底芹。又、碾渦深沒レ馬。【六】舊雨來レ人　唐、馬周傳に、舍二新豐逆旅一、主人不二之顧一、命二酒一斗八升一、悠然獨酌。悠然は、ゆつたりとした貌。【七】臥二清虛一　清虛は、王定國の堂名。【八】信美非二吾廬一　謝朓詩に、信美非二吾室一。王粲の登樓賦に、雖二信美一而非二吾土一。杜子美の五盤の詩に、成都萬事好、豈若レ歸二吾廬一。【九】呵噓　氣を吹きかけろ、韓退之が苦寒詩に、炎帝持二祝融一、呵噓不二相炎一。

【題義】王定國と應酬の詩で、兩傳千里意を述べたものである。

【詩意】王君の詩を得ると、手書を得たやうで、毎に千里の情を傳へて居る。殊に心を宣べ、妙を寫す點に至つては、書簡も到底及ばない。眼前の百種、すべて寫してあらざるなく、少しく快からざるものがあれば、必ず詩の力を以て之を驅除し去る。傳へ聞く、都下では、霖雨十日（爾雅に、雨三日已上なるを霖といふ）、青泥は馬を沒し、街上には魚を生じて居る。（杜子美の秋述に、杜子、病に臥す。長安の旅次、雨多くして、魚を生じ、青い苔は榻に及ぶ。當時、車馬の客、舊雨の時は來るも、今雨には來らずとある。）今、王君も亦、此感があるであらう。故にいふ、舊雨人を來して、今來らず

と。既に友を得なく、悠然として獨りで、其の清虛堂に酌んで居られることと思ふ。我は今、太守となつて、郡を治めるから、古にいふ樂い境遇ではあるが、所謂山川は信に美なるも、吾が廬にあらずである。杜子美は、又成都萬事好し、豈、吾が廬に歸るに若かんやと言つたが、我も早く蜀の故山に歸りたい。どうか、君よ九月九日の約を反古にしないやうに。そして衰冷の此の身に同情して、少しく呵噓を垂れよ。（呵噓とは、氣を吹きかけて、溫めることである。）

和鮮于子駿(一)鄆州新堂月夜(二)二首

鮮于子駿が鄆州の新堂月夜に和す　二首

去歲遊(三)新堂。春風雪消後。
池中半篙水。池上千尺柳。
佳人如(四)桃李。胡蝶入(五)衫袖。
山川今何許。疆野已分宿。
歲月不可思。駛若(六)船放溜。
繁華眞一夢。寂寞兩榮朽。
惟有當時月。依然照(八)杯酒。

去歲新堂に遊ぶ、春風雪の消えし後。
池中半篙の水、池上千尺の柳。
佳人は桃李の如く、胡蝶は衫袖に入る。
山川は今何れの許、疆野已に宿を分つ。
歲月は思ふべからず、駛すること船の溜より放つが若し。
繁華は眞に一夢、寂寞兩ながら榮朽。
惟當時の月あり、依然として杯酒を照らす。

應憐船上人。坐穩不知漏。(九)

應に憐むべし船上の人、坐穩漏を知らざるを。

【字解】【一】鮮于子駿　宋史、鮮于侁傳に、神宗朝、自利州路運使判官、爲京東西路轉運使とある。【二】鄆州新堂　宋文鑑に、鮮于子駿新堂夜坐、月色皎然、由運理亭、信步、庭中徘徊久之、因爲五言一首とある。元和郡縣志に、漢、東平國、後爲郡、隋分兗州萬安縣、置鄆州。宋史、地理志に、鄆州初爲京東路、熙寧七年、分爲東西兩路、鄆州屬西路。名勝志に、今爲鄆城縣、屬濟寧州。【三】去歲遊新堂云云　王文誥いふ、上年二月、公自濟南至鄆州と。【四】如桃李　曹子建の詩に、南國有佳人、容華若桃李。【五】疆野已分宿　疆野は一本に疆界に作る。王注に、此言鄆州與徐州。楚辭、屈原九章に、如列宿之錯置。【六】船放溜　唐、皇甫冉の出沅江口詩に、放溜出江口、回瞻松栝深。【七】繁華眞一夢　文選、阮嗣宗の詠懷詩に、繁華有憔悴。【八】照杯酒　李太白の詩に、惟願當歌對酒時、月光常照金尊裏。【九】坐穩不知漏　杜子美の詩に、江流大自在、坐穩興悠哉。范成大の詩に、扁舟坐穩何嘗歸。不知漏は、不知更鼓の意。

【題義】此詩は元豐元年四月の作である。鮮于侁が鄆州新堂、月夜の詩を和したのである。東坡の自注にいふ、前次韻、後不次と。紀昀は前詩を評して、秀韻天然といひ、後詩を評して、起八句、意境深微と言つた。

【詩意】我は去年、濟南より鄆州に至つた。鄆州の新堂に遊んだのは、春風が吹き初めて、雪の漸く消えた後であつた。池中の水は、半篙（竹竿）に及び、池上の柳も、千尺の高さとなつた。堂上の佳人、其の容華は桃李の如く、起つて舞へば、胡蝶は翩翩として衫袖に入る。又、新堂の眺望をいふと、山川相繆ひ、州郡の疆界は、列宿の錯置せるがやうであつた。何れが是れ鄆州、何れが是れ徐州か、更に判らなかつた。歲月は思ふべからず、思へば心を勞する。そして其の駛することの速かなる、船

の溜水（たまり水）より放つて、江口を出るやうである。昨日は今日の昔、世の繁華も、觀ずれば、眞に一場の夢に過ぎない。榮ゆるものも、朽ちたものも、時が過ぎると、兩ながら寂寞である。ただ當時の月影だけが、依然として杯酒を照らして居る。李太白の言つたやうに、ただ願ふ、歌うべく酒に對する時、月光は常に金尊の裏を照らすことを。江流は大自在であるから、之に對して坐穩（安居の意）すれば、興悠なるかな。かくて夜の更け行くのも知らない。

(一)明月入華池。反照池上堂。
堂中隱(二)几人。心與水月涼。
風螢已無迹。露草時有光。
起觀(三)河漢流。步屧(四)響長廊。
名都信繁會。千指調笙簧。
先生病不飲。童子爲燒香。
獨作五字詩。清(五)絶如韋郎。
詩成月漸側。皎(六)皎兩相望。

【字解】【一】明月入華池　梁簡文帝の詩に、欲待華池上、明月吐清光。【二】隱几人　莊子、齊物論に、南郭子綦、隱几而坐。隱は凭なり、几によりもたれる意。【三】心與水月涼　李太白の贈仲濬詩に、觀心同水月。【四】河漢　銀漢といふに同じ。宋之問の詩に、八月涼風天氣昌、萬里無雲河漢明。【五】步屧　南史に、袁粲領丹陽尹、嘗步屧白楊郊野間。杜子美の遭田父泥飲詩に、步屧隨春風、村村自花柳。蘇州圖經に、響屧廊、以梗梓板藉其地、西子行、則有聲、因名之。【六】清絶如韋郎　杜子美の詩に、浩歌滄水曲、清絶聽者愁。韋郎は韋蘇州應物、白樂天は其五言の自ら一家を成すを稱す。白居易傳に、韋蘇州歌行、才麗之外、頗近興諷、其五言詩、又高雅閑澹、自成一家之體。賓退錄に、韋應物、京兆、長安人、貞元二年、由左司郎中補外、得蘇州刺史、年九十餘、不知所終。【七】月漸側　斐説の詩に、星沈月側時。【八】皎皎　毛詩國風に、月出皎兮。

【詩意】明月は、清い光を吐いて、華池に入り、更に池上の堂に照り返して居る。これ鄆州新堂月夜の景である。堂中几に凭りて坐せるは何人、鮮于子駿其人で、心は水月と與に涼しい。李太白も、心を觀ずれば水月に同じと言つた。月が明かに、風もなく、螢も消えて迹なく、露草の中、時に光を放つて居る。起つて天の川の流れるを觀、步屧（屐をいふ）の音は、長廊に高い。名都は、まことに繁會で、此處彼處に音樂が起つて、千指、笙簧を弄して居る。鮮于先生は元來、酒を好めども、今は病の爲に飲まない。童子は傍らに侍つて香を燒いて居り、先生は獨り五言の詩を作つて居られる。其の調の清絶なるは、韋蘇州によく似て居る。白樂天も韋蘇州が五言の詩は、高閑雅淡で、自ら一家を成すと稱揚して居る。詩が成りて、月も漸く傾いた。明月皎皎、月と人と兩ながら相望むは、此の新堂の月夜である。

【餘錄】宋文鑑に、鮮于侁の新堂夜坐詩を載す、曰く、秋風動微涼、天雨新霽後、閑齋獨隱几、明月在高柳、新堂景色、與此所言略同、前一首、卽次夜坐韻也。唐宋詩醇に、新堂之勝在池、故

兩首、皆以池爲言、前言春雪之消、後言秋月之入、而以惟有當時月二句、爲兩首通脈胳、寫池月返照之景、清沁脾腑、とある。

送將官梁左藏赴莫州

將官梁左藏莫州に赴くを送る

燕南垂趙北際。
其間不合大如礪。
至今父老哀公孫。
蒸土爲城鐵作門。
城中積穀三百萬。
猛士如雲驕不戰。
一旦鼓角鳴地中。
帳下美人空掩面。
豈如千騎平時來。
笑談謦欬生風雷。

燕の南垂、趙の北際、
其間合はざること大さ礪の如し。
今に至るまで父老公孫を哀しむ、
土を蒸して城となし鐵を門と作す。
城中の積穀三百萬、
猛士は雲の如きも驕つて戰はず。
一旦鼓角地中に鳴り、
帳下の美人空しく面を掩ふ。
豈如かんや千騎平時に來り、
笑談謦欬風雷を生せんには。

【字解】【一】梁左藏　梁交、左藏を司る。元豐類稿に、興國初、左藏之財、既充斥、始分爲三、錢與金帛、皆、別藏、典守者、亦各異云云。左藏は國庫、前にも出づ。【二】莫州　文安郡は鄚縣に理す。唐の開元中、鄚の字は鄭の字に類するを以て、改めて莫となすといふ。漢は鄚縣、唐は鄚州、後、莫州と改む。宋に至て、廢す。故城は今の直隸任丘縣の境に在る。【三】燕南垂趙北際　云云　後漢、公孫瓚傳に、童謠曰、燕南垂、趙北際、中央、不合大如礪、惟有此中可避世、瓚既破劉虞、盡有幽州之地、自以爲易地當之、乃徙鎭焉。【四】蒸土爲城云云　晉、載記に　赫連勃勃起都城、蒸土築之、錐入一寸、卽殺作者、幷築之。酈道元の水經注に、夏州統萬城、蒸土加功、雉堞雖久、崇墉若新。太平御覽に郡國志を引き、鄚縣有易京城、公孫瓚築京、以自固、圍壍十重、以鐵爲門。【五】猛士　如雲、文選、李少卿答蘇武書に、猛將如雲、謀臣如雨。【六】空掩面　左傳、哀公十六年、子西以袂掩面而死。【七】千騎平時來　古樂府、羅敷行に、東方千餘騎、夫壻居上頭。【八】謦欬　せきばらひ。輕きを謦といひ、重きを欬といふ。莊子、徐無鬼篇に、謦欬吾君之側。【九】葛巾羽扇　語林に、諸葛武侯、白葛巾持羽扇、持麾三軍。【一〇】投壺雅歌　後漢、祭遵傳に、遵爲將軍取士、皆用儒術、對酒設樂、必投壺雅歌。【一一】清燕　南史、任昉傳に、昔承清宴。【一二】健兒　魏志、呂布傳に、謂曹性曰、卿健兒也。世說に、桓車騎過江時、公私儉薄、自使健兒鼓行劫鈔。杜子美の哀王孫詩に、朔方健兒好身手。【一三】虓虎　詩、大雅に、進厥虎臣、闞如虓虎。闞は虎の怒りて鳴くをいふ。【一四】懷思　王注に、東方健兒、則梁左藏所替罷、故懷思之也。【一五】廉恥將　杜子美の詩に、安得廉恥將、三軍同憂眠。【一六】雪兒唱　王子韶の雞跖集に、唐、韓定辭酬馬彧詩云、盛德好將銀筆逃、麗辭堪付雪兒歌。馬問雪兒事、韓曰、雪兒、李密歌姬也、每賓僚、文章奇麗者、卽付使歌之。

【葛巾羽扇紅塵靜。
投壺雅歌清燕開。
東方健兒虓虎樣。
泣涕懷思廉恥將。
彭城老守亦凄然。
不見君家雪兒唱。

葛巾羽扇紅塵靜かに、
投壺雅歌清燕開く。
東方の健兒虓虎の樣、
泣涕して懷思す廉恥の將。
彭城の老守も亦凄然、
君が家の雪兒の唱ふるを見ず。

【題義】此詩も前詩と同じく、元豐元年四月の作である。紀昀は此詩を從公孫瓚說入、毫無取義、只圖切莫州耳、入題無味亦無力、無味無力也と評して居る。

【詩意】後漢の公孫瓚は、劉虞を禽にして、盡く幽州の地を有つた。此より前に、童謠が行はれたが、それは、燕の南垂、趙の北際、中央合はざること大さ礪の如し。惟、此中に世を避くべきありといふのであつた。公孫瓚は、易といふ地が之に當ると思つたから、遂に鎮を其の地に徙した。そこで、盛に營壘や樓觀を修め、又、他日、非常の變あるを慮つて、高きに居り、鐵を以て門を爲つた。左右を斥け去りて、男の七歳以上なるをば、門に入れなかつた。そして專ら姫妾を侍らせて、事に當らせた。文簿や書記は、皆、汲み上げる。婦人に大聲を習はせ、數百步の外までも聞えるやうにして、敵令を傳へしめる。かくて謀臣猛將がだんだん乖き散る。すると、瓚はいふ、我は昔、畔胡を塞表に驅り、黄巾を孟津に掃ふ。當時、天下は指麾して定むべしと思つたが、今は發心し、兵を休め、力耕して以て凶年を救ふに如かず。積穀三百萬斛、以て天下を待つに足ると。建安三年、袁紹は瓚を攻めた。瓚は其子に書を遺つていふ、袁氏の攻狀は、鬼神の如くで、梯衝は吾が樓上に舞ひ、鼓角は地中に鳴ると、戰敗れて姉妹妻子を縊り、火を引いて自ら焚死した。此詩は此の史實に據つたものである。さて公孫瓚は土を蒸して城となし、鐵を門となす。其の城中に積んだ穀は、約三百萬、猛將は雲の如く、謀臣は雨の如きも、驕つては敵と戰はない。一朝鼓角が地中に鳴つて、敵の軍勢が攻め寄すると、忽ち敗れて、帳中の美人は、袂を以て面を掩ひ、空しく死んだのである。これは、かの千騎が平時に來つて笑談し、咳ばらひの風雷を生ずる有樣には到底及ばない。兵火も歇んで世は太平になつた。白葛巾を冠り、羽扇を手にして、紅塵靜かに、酒に對し樂を設け、投壺に、雅歌に、樂しい世界が來ると、流石に東方の健兒、虓の如く虎の如きも、泣涕して其の昔を懷思するであらう。殊に廉恥を知る將に至つては、情に堪へ難いものがあらう。彭城の老守である我も、一念茲に到ると、凄然たるものがある。唐の李密に、雪兒といへる寵姬があつた。賓客がある每に、雪兒をして之を歌はしめたさうであるが、今、我は君が家の雪兒が此の情緒を唱へるのを見ないものである。

【餘錄】莫州は乃ち公孫瓚の易京である。古くは史記、趙世家に見ゆ。太平寰宇記に、河北道莫州文安郡領二鄚縣・任邱・長豐三縣一、易京城在二鄚縣西北三十里一云云。左藏は國庫である。隋の文帝の時、庫藏皆滿つ。乃ち左藏の院を開き、屋を構へて、以て之を受く。唐の時、左右藏に、皆、令・丞を置く。左藏は、錢帛雜綵天下の賦調を掌り、右藏は、金玉・珠寶・銅鐵・骨角・齒毛・綵畫を掌る。宋の初め、諸州の貢賦は均しく左藏に輸す。南渡の後、左藏南庫及び封樁庫を分設す。宋史、職官志に左藏庫、東西作坊使、階二武顯大夫一云云。楊奐の汴故宮記に、宣徽院北曰二御藥院一、其北曰二右藏庫一、右藏庫之東曰二左藏庫一と見ゆ。

昭和四年八月二十五日印刷
昭和四年八月二十八日發行
昭和四年十一月十七日再版發行

續國譯漢文大成 文學部 第十四卷
（岡山製本）
【非賣品】

著作權所有

編輯兼發行者 國民文庫刊行會 東京市神田區小川町一番地
右代表者 鶴田久作 東京市本郷區西片町十番地
印刷者 渡邊一郎 東京市小石川區西古川町二十五番地
印刷所 中外印刷株式會社 東京市小石川區西古川町二十五番地

發行所 國民文庫刊行會
電話神田（五三五番）（八三八番）
振替東京一八五七二番

654
56

國立國會圖書館藏